

特定非営利活動法人国際ボランティア学生協会 2011 年度年次報告書



熱意は人を動かし、社会を動かす

IVUSA では、大学生を中心に延べ約 2,000 人が東日本大震災の現場で活動しました。

IVUSAは今年20周年を迎えました。
皆さまに支えられ、育てられて
「成人」することができました。
これからも、学生の行動力と熱意で
社会を元気にしていきます。

IVUSA Annual Report2011

Contents

代表挨拶	…5
IVUSAの目指すもの	…6
東日本大震災に対する取り組み	…9
国際協力事業	…14
環境保護事業	…16
地域活性化事業	…21
災害救援事業	…24
危機対応研究所	…26
その他の事業	…27
メディア掲載一覧	…31
2011年度学生組織図	…32
研修事業	…33
会計報告	…36
法人概要	…38

ご挨拶

1993年3月、ラオス小学校建設からスタートした本協会も、気が付いてみると本年度20年を迎えようとしています。この間、多くの方々からご支援・ご協力を賜り、国際協力、環境保護、地域活性化、災害救援の4つの活動を柱として、1,394の事業に延べ58,068名が参加しました。まずは、今回の報告書のテーマであります「ご縁」を多くの方々にも賜りましたことを深く感謝申し上げます。

ふり返ってみますと、この20年、日本社会は閉塞感に包まれ、夢や希望といったポジティブな言葉が白々しく聞こえる社会となってしまったようです。そして、学生たちはというと「ゆとり教育世代」と言われ、その特徴は「人間関係が浅い」「リスクを極端に嫌う」「言われたことしかしない」と酷評されています。

学生の本分は、勉学にあることは言うまでもありませんが、社会に出て必要とされるコミュニケーション能力を養うのも学生時代に必要不可欠なことのひとつなのではないでしょうか。

本協会の活動は何と言っても人とのコミュニケーションが中心にあります。それは、学生が社会に出る前に身につけておくべき多くの学びがそこにはあるからです。

活動を行うためにはチームワークが必要です。まずここで、人間関係の葛藤があります。そして活動を行う地域や場所には、様々な文化や価値観の違い、さらには厳しい環境で生きる人たちとの触れ合いがあります。その人たちとコミュニケーションをとることによって、社会常識を学び、さらに厳しさを人間の強さ、そしてやさしさを学んでいるのです。

昨年3月11日に発災した東日本大震災においても、宮城県の石巻市・気仙沼市・山元町を中心にこれまで19回（2012年3月31日現在）、延べ約2,000名の学生が災害復旧活動を行いました。ここでは、マンパワーを活かした瓦礫の撤去などを通じて、若者が持つ明るさ、そして泥だらけになって働く姿によって、多くの被災者の心に生きる希望を灯すことができたと感じています。

本協会では、これらの活動に参加するためのスキルアップトレーニングとして、CMT（クライシス・マネージメント・トレーニング）やHRT（ヒューマン・リレーション・トレーニング）等、自己理解、他者理解、社会理解を深める研修なども行っています。

現在、本協会には、約85大学1,800名の学生が所属しております。私たちは、これまでも、これからも、若者の持つパワーと感性を活かして社会に貢献して参ります。

特定非営利活動法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）

代表理事 下村 誠



IVUSAの目指すもの 学生による社会の「創造的再生を目指して」

■若者世代でも進行する無縁社会化

2010年にNHKが特集し、その年の流行語の一つになった「無縁社会」。

高齢者の「無縁死」（身元不明の死や行き倒れ死など）や、ちょっとした躓きで路上生活になってしまうほどセーフティネットが脆弱になっている現実が大きな衝撃を与えました。地縁・血縁そして社縁（企業を媒介とした人間関係）という基本的な「絆」が、戦後の都市化や核家族化、そして最近の終身雇用制の揺らぎに伴う労働市場の流動化によって希薄になっています。

もちろん、「無縁社会は言わば歴史の必然であり、自由を勝ち取るプロセスを経て結果として生まれたもの」（*1）であるのも事実です。人間関係が持つ煩わしさを避け、気ままに生活したいという欲求が人間にはあり、「近代化」に共同体からの個人の解放という側面がある以上、「私たちが無縁社会を選択した」（*2）ことは間違いありません。

無縁化は高齢者だけの問題ではなく、若者世代においても確実に広がっています（*3）。NHKの「無縁社会」の特集（2011年2月11日放送）も第2回目は若者世代の問題を取り上げていました。

若者の無縁化の背景にあるのが、若者世代（特に15～24歳）の非正規雇用の比率が増大していることです（*4）。企業や行政は全体の人件費を抑えるために、既存の正社員のリストラよりも容易であった新規採用を抑えるという方向性を取ってきました。ハーバード大学社会学部長でライシャワー日本研究所教授でもあるメアリー・C・ブリントン氏が『失われた場を探して』（NTT出版）で強調しているように、その結果、多くの若者が学校から職場への移行がうまくいかずに、自分の所属する「場」を失ってしまったのです。

では、NHKの特集でも紹介されていた「ネット縁」がオルタナティブ（代替的）な縁になり得るかといえば、手軽な繋がり感を持つことはできたとしても、自分が困った時に助けてもらえるセーフティネットとして機能するのは難しいと言わざるを得ません。

■若者の社会離れ

26歳の社会学者である古市憲寿氏が著書『絶望の国の幸福な若者たち』（講談社）の冒頭で、ニューヨークタイムズ東京支局長マーティン・ファクラー氏の「日本の若者はこんな不幸な状況に置かれているのに、なぜ立ち上がらないんですか？」という質問に対し、「なぜなら、日本の若者は幸せだからです」と答えたエピソードが紹介されています。

事実、2010年の時点で20代男子の65.9%、20代女子の75.2%が現在の生活に「満足」しているという統計があります（*5）。

ユニクロとZARAでベーシックなアイテムを揃え、H&Mで流行を押さえた服を着て、マクドナルドでランチとコーヒー、友達とくだらない話を三時間、家ではYouTubeを見ながらSkypeで友達とおしゃべり。家具はニトリとIKEA。夜は友達の家に集まって鍋。お金をあまりかけなくても、そこそこ楽しい日常を送ることができる（*6）。

一方で、社会への参画（社会を担い、変えていこうという）意識の点で言えば、日本の若者は他の国の若者と比較して、際立って低いということが指摘されています。

例えば、日本青少年研究所が行った国際調査によれば（*7）、「私個人の力では政府の決定に影響を与えられない」という意見に対して、日本の高校生は8割が肯定しており、他の国と比べてかなり高いのが現状です。



*1,2 「Youth-Acty!!」 Vol.6 (IVUSA 発行) のNHKディレクター板垣 淑子氏へのインタビューより

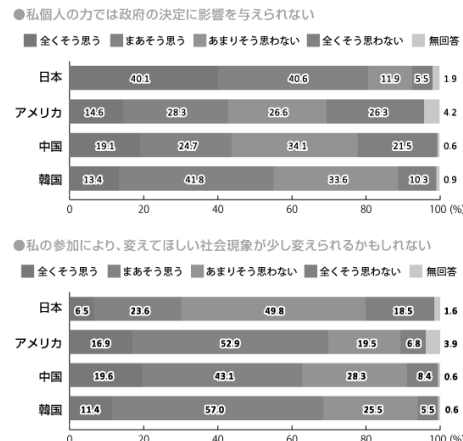
*3 若者の無縁化や社会的排除の現状については、放送大学教養学部教授の宮本みち子氏の『若者が「社会的弱者」に転落する』（洋泉社）、『若者が無縁化する一仕事・福祉・コミュニティでつなく』（ちくま新書）や東京大学教授の本田由紀氏の『「ニート」って言うな!』（光文社新書）に詳しい。

*4 15～24歳の非正規雇用率は2011年で、男性49.1%、女性51.3%となっている。（総務省労働力調査より）

*5 内閣府「国民生活に関する世論調査」

*6 『絶望の国の幸福な若者たち』 P.7

*7 日本青少年研究所『中学生・高校生の生活と意識・調査報告書』（2009年）



また、「私の参加により、変えてほしい社会現象がすこし変えられるかもしれない」という意見に対しては、約7割が否定しており、高校生たちが政治的な無力さを感じていることが分かります。

実際に、国政選挙の投票率を見ても、1990年までは6割前後ですが、1993年の第40回衆院選挙で5割を下回り、それ以降は回によって3割台にまで落ち込んでいます。一方、高齢者層は人口も多く投票率も高いため、高齢者に有利な政策が実施されやすい傾向になります。結果として、社会保障に代表される明らかに持続不可能な制度やシステムが、現在の受益者である高齢者の反対により変革できず、そのツケが国の借金という形で未来世代に先送りされるという「世代間格差」が生まれているのです(*8)。

「今、この」幸せがあれば満足できる若者たちですが、それを支える「そこそこの豊かさ」が持続可能なものである保証はありません。非正規雇用で給料が高くない、20代のうちなら、現役で働いている親と同居し、親に衣食住を頼りながら気ままに生活することも可能です(*9)。

しかし親がリタイアし、逆に介護の対象になったら。もしくは結婚や子育てが現実の問題になったら。

今までのような気ままに、そこそこの豊かな暮らしは可能なのでしょうか？

■学生は微力だが、無力ではない

IVUSAに入り、ボランティア活動に参加する学生の多くは、「社会を変えてやろう」といった大きな志を持っているわけではありません(*10)。「海外に行ってみたかった」「ボランティアに何となく興味があつた」「自分を変えたかった」「先輩に誘われて」…など、ある意味で「ささやかな」動機で始める人がほとんどと言えるでしょう。

彼らは被災地をはじめとする様々な活動現場において、圧倒的な現実の前に打ちひしがれながらも、自分たちにできることを必死に行うわけです。そして感謝されたり、必要とされることで、「自分が社会の役に立つ」という体験をします。

私ができることは小さいなこともかもしれないが、私を必要としている現場があることを知ることが、社会への当事者意識の第一歩であり、IVUSAは一人でも多くの学生や若者にそのような機会を提供したいと考えています。

■小さな物語からもう一度、大きな物語へ

少子高齢化が進み、賦課方式(*11)を取る年金をはじめとする日本の社会保障制度は維持が今後ますます難しくなっていきます。そのツケは国債＝借金という形で将来に先送りされていますが、国の借金は1,000兆円に近付き、GDP比の国債発行高は先進国内でも突出しています。

右肩上がり＝GDP・税収が毎年増大するということを前提にした日本の様々な制度やシステムを転換していく必要性が叫ばれていますが、そこで必要なのは将来を担う若者世代が意見や利害を表明することです。ボランティア活動を通じた自分自身の気づきや身近な絆作りといった「小さな物語」から、社会全体をどう持続可能なものにしていくかという「大きな物語」に対して関心を持ち、コミットしようとする学生や若者が増えていくことが求められています。

そのためにIVUSAでは、行っている活動の背景にある社会問題を構造的・俯瞰的に理解できるような研修やトレーニングも実施しています。

*8 例えば世代別の受益と負担を推計する「世代会計」によると、60歳以上の世代(約4,000万円の受益超過)と将来世代(約8,300万円の負担超過)の間に約1億2,000万円の格差が存在する。(『20歳からの社会学』明治大学世代間政策研究所編)

「老人の、老人による、老人のための政治」「ワシワシ詐欺」「孫世代のクレジットカードを使いまくっている」など様々な表現をされる。

*9 「婚活」という言葉の提唱者でもある中央大学教授の山田 昌弘氏は、このような若者を「パラサイト・シングル」と呼んだ。『パラサイト・シングルの時代』(1999年)の頃は、ずいぶん若者に批判的だった山田氏も最近では、ずいぶん同情的になった。

*10 IVUSAが会員の入会時にボランティア活動を行う目的を、利他型(最も古典的な考え方)、他者のために奉仕すること。欧米諸国はキリスト教を背景として宗教的な理由でボランティアを行う者は多い)、交換型(最終的に巡り巡って自分に利益が戻ってくるという考え方)、投資型(「自分への投資」とする考え方)、消費型(余暇活動と同じように消費されるものであるという考え方)の4つから選んでもらった。

結果は

利他型	38.5%
投資型	31.0%
交換型	24.2%
消費型	6.3%

*11 必要な年金原資を、同時期の現役世代の保険料で賄う方式。保険料率は年金受給者と現役加入者の比率で決まるため、人口変動の影響を受ける。

年金の財政方式には、将来の年金給付に必要な原資を、保険料で積み立てていく積み立て方式がある。

■学生だからこそ、できること

昨年の東日本大震災でも人と人の繋がり的重要性が再認識されました。もちろん昔は存在した人と人との強い繋がりが、差別やヨソモノの排除というマイナスの面を持っていたのも事実であり、そこに単純に戻ることは現実的ではありません。

IVUSAは、学生という社会的にしがらみのない立場から様々なアクションを起こし、人と人との繋がりを新しい形(=創造的に)で繋ぎ直す(=再生する)ことを目指しています。

もちろん学生という立場はニュートラルであり、しがらみがないのですが、その一方で高度な専門知識や実力、経験値がないのも事実です。社会の課題を解決するために努力しておられる様々なアクターの方をつなぐハブ(Hub *12)のような存在になればと私たちは考えています。

*12 霞ヶ浦の再生プロジェクトを行っているNPO法人アサザ基金代表の飯島 博氏は、次のように述べています。

学者もNPOの人も制度論が好きですよ。結局、社会問題を解決する=新たな枠組みを作るというゾーニングの発想なんです。制度や枠組みに依存し過ぎている感じがしますね。

…(中略)…

部分最適だけを目指すのではなく、より広い社会全体を変えていく全体最適という視点と「動き」を生み出そうというダイナミズムが必要ではないかと思います。

そこには発想の転換と説得力、そしてそれらに基づく合意形成が求められます。

「Youth-Acty!!」Vol.6 (IVUSA発行) より

2011年度のIVUSAの事業の概要 (主な成果)

○災害救援・防災事業：2011年3月に東北地方を襲った「東日本大震災」に対して、延べ2,000名の学生が宮城県を中心に支援を行いました。2011年は台風12号をはじめ他にも自然災害が多かったですが、それらに対しても405名の学生が救援活動を実施しました。

○国際協力事業：街頭募金を資金源としてカンボジア王国に4校目の学校(約300名収容の中学校)を建設することができました。

○環境保護事業：設立以来行ってきた多摩川清掃にあわせ、清掃キャンペーンを実施。バングラデシュやカナダなど海外も巻き込んだの活動となりました。中国緑化活動は、新たに華陰市と重慶市で各100haに植林を行いました。

○地域活性化事業：持続可能な地域創りを目的に、これまで通り新潟県関川村、十日町市、長岡市栃尾地区で地域おこし事業を実施。その他にも、地域活性化の新たな試みとしての6次産業の基礎知識や全国の活用事例等を学ぶ、「6次産業化研修会」をスタートしました。

○会員基盤の拡大：会員数が1,500名を超え、各大学クラブの運営のサポートを強化し、会員一人ひとりのニーズやアイデアを吸い上げる体制を作りました。



東日本大震災に対する取り組み

IVUSAでは、東日本大震災に対し、発災直後より情報収集を開始し、多くの方々のご支援・ご協力の下、被災地に入ってから活動をはじめ、街頭募金活動や救援物資の仕分けの手伝いなどの日常生活の中でもできる支援も実施してきました。

現在も現地での活動を継続しています。



<現地のニーズの変化とIVUSAの活動の概要>

フェーズ	求められる活動	IVUSAの活動
緊急期	救命・救援活動 (救援物資の配布、帰宅困難者への対応など)	<ul style="list-style-type: none"> ・救援物資輸送支援 1次～3次隊 2011年3月16日～4月1日 活動場所：宮城県石巻市・南三陸町・女川町・多賀城市 ・募金活動 ・炊き出し支援 1次～3次隊 2011年3月16日～4月1日 活動場所：宮城県石巻市・南三陸町・気仙沼市
復旧期	ライフライン・行政機能の復旧、避難所の運営(医療・介護含む) 瓦礫の撤去 仮設住宅の建設・引越し *最もマンパワーを必要とする時期	<ul style="list-style-type: none"> ・被災家屋の清掃などマンパワーと組織力を活かした活動 4次～19次隊 2011年4月4日～2012年3月12日 活動場所：宮城県石巻市・気仙沼市・岩手県大槌町 活動内容：被災家屋の清掃、ヘドロかき出し、床板はがし、石灰まき、家財具の運び出し、物資の配布会手伝いなど ・漁業復旧支援 14次・16次・17次隊 活動場所：宮城県気仙沼市 活動内容：カキ養殖準備支援、ワカメ養殖準備支援など ・募金活動 ・他団体との協働プログラム シンデレラ・プロジェクト サンライズ・プロジェクト
復興期	まちづくり (防災・医療・介護・産業再生など)	

1.現地へのボランティア派遣

IVUSAでは3月11日から被災地に対する支援準備を開始し、震災発生5日後の16日には現地入りして、継続的な救援・復興活動を始めました。

震災直後から3月中は救援物資の輸送や炊き出し支援。4月以降は、被災家屋でのヘドロかき出しや瓦礫の撤去などの復旧支援を中心に活動するなど、現地のニーズに合った活動を実施してきました。派遣人数：延べ1,943人（2011年度末）

千葉県九十九里方面視察派遣	3月14日	3名	千葉県旭市	10次隊	6月9日～13日	68名	宮城県気仙沼市
1次隊	3月16日～19日	7名	宮城県石巻市	11次隊	6月22日～27日	225名	宮城県気仙沼市
2次隊	3月22日～27日	11名	宮城県石巻市、南三陸町、女川町	12次隊	7月8日～11日	171名	宮城県気仙沼市
3次隊	3月28日～4月1日	16名	宮城県石巻市、多賀城市	13次隊	8月4日～8日	102名	宮城県気仙沼市
4次隊	4月4日～11日	55名	宮城県石巻市、 岩手県大槌町	14次隊	8月8日～12日	160名	宮城県気仙沼市
5次隊	4月13日～19日	64名	宮城県気仙沼市	15次隊	9月7日～15日	338名	宮城県気仙沼市
6次隊	4月21日～25日	107名	宮城県気仙沼市	16次隊	10月6日～11日	41名	宮城県気仙沼市
7次隊	5月13日～16日	15名	宮城県気仙沼市	17次隊	11月24日～28日	60名	宮城県気仙沼市
8次隊	5月20日～23日	170名	宮城県気仙沼市	18次隊	12月21日～25日	72名	宮城県気仙沼市
9次隊	5月27日～30日	117名	宮城県気仙沼市	19次隊	3月8日～12日	144名	宮城県気仙沼市

活動①救援物資輸送・炊き出し

○水や生活用品などの物資 約21トン分（飲料水約17トン、毛布250枚、生活用品約200箱）を輸送

○豚汁・ご飯などの温かいもの 各7,300食を提供

地震発生から6日目。「初めて温かいものを食べた。今まではチョコとおにぎりを家族4人でわけてたの」こういったお話を聞きながら、インフラが回復し始めた震災約半月後までの間、宮城県石巻市や南三陸町の避難所、人が多く集まる幹線道路付近で、豚汁など温かい飲食物を提供しました。この炊き出しの食材は、IVUSAとつながりのあった新潟県十日町市の有志の方々にご提供をいただき実施することが出来ました。

また、同期間、IVUSA卒業生が勤務する会社と連携し、飲料水や毛布などの物資を、石巻市、女川町、南三陸町などに輸送しました。



参加した学生の所感

3月30日、東中里地区。この日私はとあるおじさんに出会った。そのおじさんは「私はね、4人家族だけど3人が行方不明で、自転車あるから毎日安置所まわってるんですよ。義理の弟の家に来たら、被害がすご過ぎたから、お兄さんを呼び止めたんだよ。これから安置所行くので。では」と私に言ってきた。なんて声をかければいいのかわからなかった。

3月31日。この日も同地区で作業。不謹慎ながら、おじさんには会いたくないと思ってしまった。しかし会わざるを得なかった。別の場所で炊き出しをしていた班が、豚汁を持ってきてくれた。豚汁を食べたおじさんが「家族が見つからなくて、辛くて生きる意味を見失ってたけど、豚汁食べたら心が温まってきたよ。君達に生きる元気をもらったよ。ありがとう」って満面の笑みで言ってくれた。気がついたら涙が出ていた。心からうれしいと思った。（国土館大学3年 入大輝）

活動②被災家屋の清掃をはじめとするマンパワーと組織力を活かした活動

○被災家屋での作業 251件

○その他物資の配布会手伝いや側溝のヘドロかき出しなど 42件

自宅での生活を再スタートさせることを決めた方々のお宅で、家財の運び出しや畳・床板上げ、床下のヘドロかき出しなど、気仙沼市の災害ボランティアセンターと連携し、住民の方のニーズに沿った活動を実施しました。

毎日明るく元気に活動する大学生の姿が何よりの精神的な支えになったと、地元の方々に大変喜ばれました。



現地の方の声

国際ボランティア学生協会の皆さんに対する感謝とお礼は、とても表しきれません。

でも「何かあったら助けに行くから」とはあえて申しません。なぜなら皆さんのかけがえのない故郷は、常に無事であって欲しいからです。

気仙沼市の震災前の人口は7万4千人程でありましたが、大津波により一瞬にして1,300人を超える尊い命が奪われてしまいました。私の家族は幸いにも全員無事でしたが、自宅は大規模半壊となり、4ヶ月間の避難所生活を余儀なくされました。

ようやく自宅改修の目処が立った頃、当地で活動をされていた皆さんとのご縁が生まれ、修繕の口火を切ることが出来ました。8月5日から8日までの4日間、20人程の方々に海水とヘドロにつかった床板剥がし、床下に堆積した泥の掻き出し、床板洗浄などの作業をしていただきました。

また、震災から半年目の9月11日には、350人もの大部隊が統制の取れた動きと爽やかな笑顔で、景勝地である岩井崎の清掃や倒木処理、さらに広範囲にわたる草刈り・側溝泥上げなどを実施され、その姿を見たとき「日本はいい国だなあ」としみじみ感じ入った次第です。

被災以来、私は「泣きごととは言まい」と密かに誓っておりましたが、苦しい時に皆さんの温かみに触れたとき、胸が熱くなりつい涙が溢れそうになりました。冒頭述べたように「お返しに助けに行く」というような約束はいたしません、復興を果たすことで皆さんのご恩に報いたいと思います。また、代償というにはあまりにも痛ましいですが、東日本大震災を教訓に「国家の危機管理態勢」と「国民全体の防災避難意識」が格段に向上することを願うものであります。

結びに、皆さんの益々のご活躍とこれからの人生が「幸多かれ」と祈念申し上げます。ちょっぴり有名になった岩井崎の「龍の松」とともに、再会も楽しみにしております。(気仙沼市民 畠山 勉様)

活動③漁業復興支援

○ワカメ養殖用の石土嚢 2,200個

夏ごろには復旧から復興に向けた動きも始まりました。IVUSAでは漁業復旧支援として、カキの種付けや、津波で全て流されてしまったワカメの養殖用網の基礎となる石土嚢を製作しました。



2.募金活動

- 募金参加者 732名
- 募金協力者 11,365名
- 募金総額 5,422,795円

地震発生後、現地での支援に向けた動きと並行し、首都圏および近畿地方で街頭募金を行いました。12月まで計71回、732名のIVUSA会員で支援を呼びかけ、11,365名の皆様から計4,754,262円のご協力をいただきました。

また、他団体との共同募金活動や、各大学の学園祭などのイベントでの募金箱の設置による支援の呼びかけも行い、計20箇所で668,533円のご協力をいただきました。

皆様からお預かりした募金総額5,422,795円のうち8割は日本赤十字社にお送りしました。残りの2割は、IVUSAの被災地での活動の際に使用する炊き出しの道具や支援物資購入のための費用として活用させていただきました。



参加した学生の所感

私は、普段の活動から募金チームに所属をしています。この募金のチームはアジア教育支援のための募金や水害、豪雪などの災害の時に義援金を集める時などに先導を切って募金活動を行うチームです。今回の東日本大震災が起きて2日後には募金を行おうという団体の方針で動き始めました。私は、震災が起きてから両親の意向で神戸にある親戚の家にしばらく行くことになったので関西の方で募金活動を行うことになりました。

「東北関東大震災における義援金を集めています。ご協力お願いします」と叫んでいると入れて下さる方々が、「私も、阪神淡路大震災の時にたくさんの人に支えられたの」「俺も、阪神淡路の時に友達無くしたんや。だから入れたる」と想いを伝えながら入れて下さったことに感動しました。

今回の街頭募金を通じてたくさんの方々と出会いました。「現地に行けなくてもできることがある」をモットーにこれからもがんばって行こうと思いました。(聖心女子大学3年 黒田 麻紀子)

3.シンデレラ・プロジェクト

○ぴったりの靴とメッセージカードを届けた子どもたち 149名(気仙沼市・南三陸町)

IVUSA は発災直後から被災地に救援物資の輸送支援をする中で、現地では子どもの靴が不足していることを知りました。靴は一人ひとりサイズが違うため救援物資では行きわたりにくかったのです。そのことを、NPO 法人エコプラスさん・下北沢のスポーツマリオさんに話したところ「子どもたちにサイズの合った靴を履いてもらおう!」と、3団体が連携してこのプロジェクトが立ち上がりました。

カフェや古着店、ヘアサロン、スポーツ用品店、飲食店、雑貨店など約80店舗に専用の募金箱を設置して頂き、1口500円の寄付や子供たちへのメッセージカードを募りました。また、靴にはサイズや、男子用・女子用などの違いがあるため、これらのニーズに対応するために被災地の子どもたちに直接カタログから好きな靴を選んでもらうという方法をとりました。今回の靴をプレゼントするプロジェクトから始まり、復興の段階においてその時に必要な物を届ける末長い支援を続けます。



【主催】NPO法人エコプラス、NPO法人国際ボランティア学生協会、
NPO法人エデュケーショナル・フューチャーセンター

【特別協賛】株式会社スポーツマリオ、esCafe/Dining

あなたの500円が、
被災地の子どもの
新しい一歩になる。



4.サンライズ・プロジェクト



IVUSAが地域活性化分野の活動で協働している新潟県十日町市と協力し、十日町の耕作放棄地で農作物の栽培を行い、作物を販売した収益を義捐金として復興に充てるプロジェクトです。2011年度は6月～11月まで、IVUSA卒業生が「地域おこし協力隊」として総務省から派遣されている十日町市中里地区で、活動を実施しました。

これからも、地方で問題となっている耕作放棄地の問題解決と共に、東日本大震災被災地支援を実施していきます。

【主催】サンライズプロジェクト実行委員会

【共催】十日町市役所、ちちばす、株式会社スローコメディ広告会社、中里総合クラブYO-BE、NPO法人国際ボランティア学生協会

【協力】(株)おおぞら、(有)なかさと食品、大村建設(株)、(有)中里測量

5.報告会の実施



東日本大震災復興支援活動を行っている団体と合同で報告会を開催しました。報告会では、これまでボランティア活動に参加した学生や若者が自らの体験をふり返し、何を学び、何を感じたかをより多くの人たちと共有するとともに、大学生・若者の団体同士で今後どのような協働した支援活動が可能かについて議論しました。

【関東】日時：10月2日 場所：国土館大学世田谷キャンパス 参加者：170名
共催：Youth for 3.11、United Youth

【関西】日時：10月22日 場所：立命館大学衣笠キャンパス 参加者：55名

※その他にも、防災協定を締結している千代田区社会福祉協議会と連携した区内での復旧支援活動や、東京都と連携した県外移住者に対するボランティア活動、救援物資の仕分け作業等を実施しました。

■東日本大震災ボランティア活動に対してご支援頂いた方々(順不同・敬称略)

◇現地でのボランティア派遣に対する助成

公益財団法人車両競技公益資金記念財団

◇企業・団体

ラブリバー多摩川を愛する会、ゆるDJ+ゆるライブイベント ピクニックフェス、hand in hand、クマ吉

◇個人

森谷義文、塩谷貴子、渡辺真衣、滝誠一郎、伊東亜佐子、坂田宏輔、船越楓、神村知佳、小久保淳、サノタカコ、IVUSA12期、ヨネモリタカフミ、照屋幸、板東美帆、齋藤えみ、松下陽一、加藤高明、後閑諒一、山本輝、松倉公子、大津秋子、濱田篤誠、丸岡達郎、原田康介、小早川藍、鈴木成知、堀口久美子、桑原善雄、深山恭介、川邊善裕、五十嵐光、博田祐二、由布佳代子、若林充、アキモト、片山洋平、齊藤栄次郎、泉水英郷、平林直人、桑原敏子、IVUSA16期、武田晃一、奈良裕介、河西佑樹、宮野光喜、小泉信子、菊込里佳、高橋弘樹、星昭良、風見大輔、長嵐順史、大串太一、宮沢真実、江口慎吾、柴田啓介、宮本靖子、星野倫、富野亜紀、サカイユキ、今井祐宣、小泉道子、山田紋子、高野さよ子、池間みどり、菊地沙弥華、伊藤路子、柴田薫、阿部博志、桑原望、藤木晴夫、下村妙子、越川泰介、濱野久美子、堂前梢、堂前紀郎、山口七重、田中信子、加藤美江子、飯田雄也、中山雅之、安藤翼、高井美喜恵、染川悟

◇救援活動炊き出し準備・食料提供協力

【十日町市】JA十日町女性部中里支部倉俣班、清田山集落、田川町2丁目6班、尾身貞夫、小海五月、林圭亮、羽鳥愛、清水利一、小林弘、相崎芳則、茂野雄一、仲嶋京子、高橋寿美子、古高新蔵、田村友佳、高橋奈美、大津真琴、大津真由美、他有志の方々、【津南町】半戸恵里子、大平孝子、高橋のり子、石澤トミ子、藤木晴夫、津南町民有志の方々、【南魚沼市】中島真、中島寛音、【小千谷市】竹内明子、【長岡市栢尾地区】とちお同住会(千野・渡辺)

◇救援物資協力

株式会社カープスジャパン、日本アルコール産業株式会社、相日防災株式会社、株式会社レスキューナウ、株式会社おむすびころりん本舗、テーブルマーク株式会社、エースコック株式会社、エーザイ株式会社、株式会社セイワ食品、マルコム株式会社、テルモ株式会社、オムロンヘルスケア株式会社、株式会社遠藤青汁高知センター、新潟県関川村、新潟県長岡市東日本大震災ボランティアバックアップセンター、新潟県長岡市半蔵金集落、国土館大学、株式会社資生堂、東洋水産株式会社、会員、卒業生、関係有志

◇救援活動協力

銀河鉄道株式会社、国土館大学、株式会社オンザウェイ、アパホテル株式会社、株式会社井上、東京都庁、千代田区社会福祉協議会、一関市協働推進課、藤沢町(現一関市)町民課、石巻災害復興支援協議会、石巻専修大学、気仙沼市危機管理課、気仙沼市まちづくり推進課、気仙沼市社会福祉協議会、気仙沼市社会福祉協議会本吉支所、気仙沼市障害者支援センター、気仙沼市復興商店街事務局、宮城県北部鯉鮎漁業組合、八瀬森の学校、南三陸町役場、女川町役場、多賀城市役所、大槌町社会福祉協議会、栗原市社会福祉協議会、公益社団法人ジャンティ国際ボランティア会、FIWC、RQ市民災害救援センター、とちぎボランティアネットワーク、APCAS、天理教災害救援ひのきしん隊、金光教気仙沼教会、気仙沼ボランティアネットワーク、唐桑ボランティア団、JYMA、アステオ

国際協力 世界中に親戚を作る。

教育基盤が破壊されたカンボジア教育に対し、2006年からカンボジア教育支援プログラムとして行っている「カンボジア学校建設活動」。インドの慈悲団体「M.A.Math」がインド国内で行っている住宅活動への協力を中心とした生活困窮者に対する「インド住宅建設活動」といった活動を行っています。IVUSAでは「現地の為に何が出来るか」を考え、現地の人々と同じ目線に立った活動を目指しています。

第4次カンボジア学校建設活動



【日時】2012年2月20日～3月1日

募金活動：2012年2月5日、7日、17日

【場所】カンボジア王国シアヌークビル州、東京都・京都府（募金活動）

【参加者数】71名（IVUSAの学生61名、カンボジアの大学生10名）

募金参加人数：53名

【活動内容】シアヌークビル州プリセイハヌウ町チョムカーカウワスウ中学校の建設、カンボジア現地での日本人大学生・カンボジア人大学生による共同学校建設ボランティア活動、子どもとの交流会、落成式など。

【成果】・中学校の校舎1校を建設。

・これまでに建設した3校の学校を視察してきた。どこの校長も、「多くの日本人の募金で建設された学校」「日本の大学生が建設の手伝いをしてくれた」ことで、村人や子どもたちの教育に対する意識や、学校への愛着が高まったと話していた。今回建設した学校も、開校半年後の様子を確認すると、村内の子どもの、中学校への就学率が高まってきたという状況である。（具体的数値は確認中）

・IVUSAの貢献に対して、フン・セン首相より功労賞を受賞し、感謝状とメダルが授与された。

・募金は 65,968円が集まった。

【課題・今後の方向性】学校建設のニーズは依然高いが、建設資金の調達方法も含め、カンボジアの現状に沿った活動へ転換していくことが必要。

【協力・協賛】・協力：KHJ Construction Co.,Ltd（現地カウンターパート）

・協賛：北星鉛筆株式会社、株式会社フェリシモ、BICジャパン株式会社、募金箱設置店舗（敬称略・順不同）



国際協力ワークショップ



【日時】2011年8月31日（第1回目）、10月8日（第2回目）、12月10日（第3回目）
2012年1月14日（第4回目）

【場所】国士舘大学世田谷キャンパス（第1・2回目）

東洋大学白山第二キャンパス（第3・4回目）

【参加者数】175名（4回合計）

【活動内容】国際協力に関する入門的な内容（第1回・4回）、日本の在日外国人問題（第2回）、カンボジアの教育の現状（第3回）など様々なテーマで学生が自分たちで調べ、まとめた内容を発表し、それをベースに議論する場を提供した。

【成果】学生たちが自ら調べ、発表するというプロセスの中で、「自分がいかに国際協力について理解していないか、知らないのか」ということを知り、プレゼン資料を悪戦苦闘しながら作っていった。何よりも講座を担当した学生にとっての学びと成長につながった。

【課題・今後の方向性】IVUSAが実際に行っているプロジェクトの勉強会としても組み込み、受講者を増やす試みをする。

【協力・協賛】特になし



留学生交流活動



【日時】 2011年5月～7月、2012年2月

【場所】 東京都内

【参加者数】 215名

【活動内容】 日本の大学（学生の9割以上を留学生が占める）に通う留学生と、日本人大学生との交流。

【成果】 留学生は、大学とバイトの往復の毎日と言われており、学生の9割以上を留学生が占める大学に通う留学生は、日本に来たにも関わらず、同世代の日本人大学生との繋がりが少ないという現状がある。

交流会を通して、IVUSAに入会してボランティア活動を始めたり、個人的に連絡を取り合っていたりする学生も多く、幅広いネットワーク形成に繋がった。

【課題・今後の方向性】 単発の活動にとどまらず、継続した活動に繋がっていきたい。

【協力・協賛】 株式会社フューチャー・デザイン・ラボ、日本経済大学

第6次インド住宅建設活動



【日時】 2012年2月19日～3月3日

【場所】 インド共和国カルナタカ州、ケララ州

【参加者数】 78名（学生76名、事務局2名）

【活動内容】 2年前に発生した豪雨災害被災者のための住宅建設に関わる活動、住宅に入居する直前の、外壁や内壁の塗装・家屋内の清掃、住宅入居者のためのコミュニティホールの建設、インド人学生との交流会の実施。

【成果】 ・6日間の作業でIVUSAが着手した住宅の総数 369軒（内73軒の住宅が完成）

・コミュニティホールの屋根の左官作業 2軒合計180㎡が完成

・コミュニティホールや花壇の建設に使う資材の回収 合計トラック51杯分

・活動地域でのごみ拾い 70ℓゴミ袋約100袋分

・今回の活動では、インド人学生との交流会を実施することができた。帰国後も、この活動で出会った日印両国学生たちは、SNSを使いながら交流を続けている。

【課題・今後の方向性】 今後は、ここで出来た関係性を深化し、日印両国学生が共同するプロジェクトとしていくことで、両国の未来につながる活動としていきたい。

【協力・協賛】 ・協力：M.A.Math（現地カウンターパート）

・協賛：井関食品株式会社、株式会社小久保工業所、紀陽除虫菊株式会社、新タック化成株式会社、株式会社ダンロップホームプロダクツ、おたふく手袋株式会社、横山製薬株式会社、株式会社近江兄弟社、株式会社健康体力研究所、株式会社アリスト、大作商事株式会社（敬称略・順不同）



環境保護 捨る心より捨てない心。

国内の身近な場所から砂漠化が深刻化している中国や、ゴミをゴミ箱に捨てる習慣が無いバングラデシュなど国境を越えた地域まで、様々な場所で地球環境保護のために学生ができることを行います。

ただ環境美化や植林を行うだけでなく、活動に参加した学生と地域の方との交流によって、活動を通して、参加した大学生や社会の環境保護に対する認識や理解を深めていくことを目指します。

九十九里浜全域清掃大作戦



【日時】 2011年8月25日～28日

【場所】 千葉県九十九里浜海岸全域

【参加者数】 清掃活動：742名（IVUSA会員412名、地元の子供約50名、地元企業団体等約280名）、環境教室：約40名

【活動内容】 九十九里浜海岸全域の清掃、流入する河川の清掃、地元の子どもに対する環境教室の実施。

【成果】 ・ゴミ回収 1816袋（3.6t）

・海岸漂着物は主に流入する河川から流れ着いたゴミであることから、今年度は、河川清掃（栗山川・真亀川）を実施することで発生抑制に努めた。

・地元の子どもたちの参加が、これまでは1団体だけであったが、今年は民間の学童に通う子どもや児童養護施設に入所する子ども、4団体から約50名の参加があった。

小学生の時から参加している子どもが中高生になり、企画立案及び運営そのものに携わりたいとの声もあがり、清掃活動をきっかけに、子どもたちが地域創造していく事に繋がりがつつある。

・地元企業団体からの参加も約280名あり、多くの方が環境保全に携わるきっかけを作ることができた

【課題・今後の方向性】 ・地元の民間団体との準備会合を半年前から実施し、子どもたちの参加を促すネットワークを形成する。また、企画準備段階に地元の子どもを参画させる。

【協力・協賛】 ・助成：財団法人千葉県環境財団

・実施許可、ゴミの回収、ゴミ袋の提供：千葉県旭市、匝瑳市、横芝光町、山武市、九十九里町、大網白里町、白子町、一宮町、いすみ市

・協賛：大和ハウス工業株式会社、三和酒類株式会社、赤穂化成株式会社、日本たばこ産業株式会社、サッポロ飲料株式会社、ダイドードリンコ株式会社、大塚製薬株式会社、株式会社健康体力研究所、ミドリ安全株式会社、相日防災株式会社、船山株式会社、日本アルコール産業株式会社、日本製紙クレシア株式会社、丸和ケミカル株式会社、株式会社明治、マンナンライフ株式会社、イトヤ株式会社、三立製菓株式会社、江崎グリコ株式会社、大黒工業株式会社、株式会社エフピコ、成田ゆめ牧場、鴨川シーワールド

・活動協力：千葉県白子町（8月27日宿泊所提供、開会式・交流会実施協力等）、株式会社オンザウェイ（無線機無償貸与）、大里綜合管理株式会社（企画サポート、車両貸与）、株式会社毎日コムネット（8月25日～27日宿泊場所手配、移動手段手配）、ふれあいパーク八日市場（交流会協力）、ホテルカネイグループ（宿泊場所）、千葉県山武地域振興事務所（企画サポート）、加藤光男（企画サポート）

（敬称略・順不同）



第5回熊本県天草市流木撤去・清掃活動



【日時】 2011年8月18日～22日

【場所】 熊本県天草市牛深地区

【参加者数】 175名

【活動内容】 海岸に漂着したゴミ清掃、交流会。

【成果】 ・収集したゴミは計13.8トン。3つの海岸を完全清掃することができた。

・周辺住民に交流会告知のチラシを配って招待することにより50名を交流会へと招待することができた。

・活動の方向性転換の打診があり、天草が抱える問題について共有して一緒に取り組んでいこうという関係に変化してきた。

【課題・今後の方向性】 流木の撤去と併せて、撤去した流木の再利用方法の開発や、近年大きな問題となっている磯焼けや赤潮といった漁業に影響がある課題の解決に向けた活動を実施していきたい。

【協力・協賛】 ・協力：天草市役所・牛深支所、天草海上保安署、牛深ロータリークラブ、天草漁業協同組合・牛深総合支所、熊本県海水養殖業協同組合、牛深地区婦人会連絡協議会、天草市教育委員会、牛深町天附区、牛深町茂串区、牛深町須口区、海守牛深会天草協牛深総合支所、天草宝島観光協会、天草農業協同組合

・協賛：有限会社松坂屋、南九州ペプシコーラ販売株式会社熊本南支店、樋口水産、西岡勝次商店、熊本県庁、南九州コカ・コーラボトリングス株式会社、民宿さつき荘、株式会社キヨトク、川口製菓株式会社、テイコクファルマケア株式会社、ライオン株式会社、高橋酒造株式会社、日新製糖株式会社、小泉製麻株式会社、サラヤ株式会社

(敬称略・順不同)

八王子清掃



【日時】 2011年10月30日

【場所】 東京都福生市、あきる野市、昭島市、羽村市、八王子市

【参加者数】 212名(IVUSA会員164名、一般参加者48名)

【活動内容】 八王子市他多摩地区20ルートの子どもの声があった。

【成果】 ・収集したゴミは、可燃ゴミ45ℓ 49袋、不燃ゴミ45ℓ 28袋、他危険物等4袋。

・また来たいという一般参加者の子どもの声があった。

【課題・今後の方向性】 活動実績を積み上げながら、より多くの地域の方々に参加をしてもらえるよう活動を継続していく。

【協力・協賛】 福生市、あきる野市、元木屋

第1回淀川清掃大作戦



【日時】 2011年11月26日

【場所】 大阪府高槻市、枚方市

【参加者数】 107名

【活動内容】 河川敷清掃活動、園路内の外来種草木選択除去

【成果】 ・収集したゴミは、141袋。

・三島江野草地区園路内の外来種草木を完全清掃した。

・河川レンジャーの方に、ぜひ次の活動を一緒に作りましょうと言ってもらった。

【課題・今後の方向性】 活動実績を積み上げながら、清掃だけに限らず河川管理に係わる取り組みができるよう繋がりを広げていく。

【協力・協賛】 国土交通省淀川河川事務所高槻出張所、国土交通省淀川河川事務所枚方出張所、財団法人河川環境管理財団大阪事務所、淀川資料館、大阪工業大学教授・綾史郎氏

中国緑化プロジェクト



【日時】2012年2月29日～3月9日

【場所】中国遼寧省朝陽市建平県

【参加者数】日本人43名（事務局1名 学生42名）

現地中国人スタッフ・交流会に参加した高校生・中学生・教員の方々など計約600名

【活動内容】東アジアの安定と平和のため、国境を越えた環境問題に取り組み、日中の青年たちが汗をかき寝食を共にしながら真の友情を育み朋友となることで、民間による平和外交使節団としての責務を果たすことを目的に、現地該当地域の自然環境や土壌条件を考慮し、適応性と活着率が高く、土砂や砂を固め土壌流出を防ぐ防砂林、地元住民の生活を考慮した経済林の植林作業。また、灌水作業や土壌整備等植林するために必要な作業を行う。

【成果】当初、華陰県での活動を準備していたが、出発直前に現地で洪水が起こり、急遽、建平県での植林活動となった。突然の予定変更による現地での調整は多くの困難があったと推察できるが、建平県政府関係者、団体、植栽地の住民、多くのスタッフの方々に尽力いただき無事活動を行うことができた。急な開催地変更で出会った縁を大切に、今後も継続的に植林活動を建平県で行って行こうと考えている。今回滞在期間中に学生が行った作業は、植林本数約300本（コノテガシワ）、土壌整備と植栽穴約600か所作成。

【課題・今後の方向性】

【協力・協賛】・助成：日中緑化交流基金（小淵基金）

・協力：中国青年国際人材交流中心（現地カウンターパート）

・協賛：株式会社たねや、トップ製菓株式会社、株式会社聖護院八つ橋、株式会社マスマヤ、山芳製菓株式会社（敬称略・順不同）

里山保全活動



【日時】2011年4月10日、4月17日、5月15日、6月19日、7月10日、10月16日、11月20日、2012年1月15日（計8回）

【場所】滋賀県東近江市愛東地区

【参加者数】計252名

【活動内容】里山整備、農家のお手伝い、地域の祭りのお手伝い。

【成果】他団体との新たな繋がりにより、コラボイベントの実施を企画することができた。また、これまで4年間活動してきたことで、活動場所近くの道の駅で、里山での森林整備の際に取れた薪を売らせてもらえるようになった。

【課題・今後の方向性】地元他団体とのコラボ企画を実現したり、地域のお祭りの手伝いなどをすることにより、地域との繋がりを強化していく。それにより、愛東地区でのコミュニティ作りの一助となること。

【協力・協賛】・連携：NPO法人愛のまちエコ倶楽部

・助成：大阪コミュニティ財団

利根川清掃活動



【日時】2011年6月26日（第1回）、11月20日（第2回）

【場所】渡良瀬川（東部日光線新古河駅周辺）

【参加者数】計89名

【活動内容】渡良瀬川近辺のゴミ拾い、「ゴミをなくすためにどんなアクションが考えられるか？」についてワークショップ。

【成果】本事業は、新たな「地域との縁」の創出と、協力頂いた国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所と新たに関係を築くことができた。

【課題・今後の方向性】地域に開かれた地域の清掃活動として地域住民の参加を目指す。

【協力・協賛】国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所

第2回琵琶湖葦刈り活動



【日時】2011年12月11日

【場所】滋賀県長浜市

【参加者数】97名

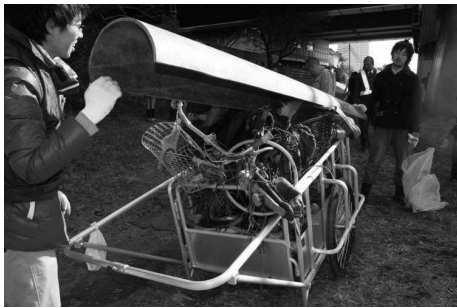
【活動内容】琵琶湖湖岸の葦の刈り取り。

【成果】毎年担当区域の葦の刈り取りを完遂することにより、継続的な活動をすることができた。

【課題・今後の方向性】年に1回の単発的な事業ではなく、刈り取った葦の再利用など、通年で続けられる事業とすることを目指す。

【協力・協賛】公益財団法人淡海環境保全財団

第19回多摩川清掃大作戦



【日時】2011年11月23日(水・祝)

【場所】世田谷区内の多摩川河川内及び河川敷(約12km)、川崎市高津区内の河川敷(約3km)

【参加者数】700人(一般参加者：450人、IVUSA：250人)

【活動内容】河川内及び河川敷の清掃活動、清掃を行いながらの多摩川の環境教室、第8回ラブリバー多摩川子ども絵画展表彰式、レクリエーション。

【成果】・「拾う心より、捨てない心」をモットーに、19回目の開催となった活動は、今年も、御家族連れやお友達と一緒に来た子どもたちや企業の方など、幅広い年代の方々に参加していただいた。

・ごみ回収量 可燃ごみ：210袋、不燃ごみ：35袋、ペットボトル：105袋、ビン・缶：15袋(ごみ袋の容積は1袋あたり30リットル)、粗大ごみ：自転車3台、バイク1台、ソファ1台など

【課題・今後の方向性】今後も地域に根差した活動として多くのコミュニティの縁や出会いをつなげられるよう、子どもから高齢者の方、学生や企業の方々とは幅広い年代の方とともに多摩川で楽しいひとときを過ごせる活動を継続していく。

【主催】ラブリバー多摩川を愛する会、特定非営利活動法人国際ボランティア学生協会

【後援】世田谷区、世田谷区教育委員会、世田谷区社会福祉協議会、川崎市、川崎市教育委員会、国土交通省関東地方整備局京浜河川事務所、玉川高島屋S.C、株式会社高島屋玉川店、東神開発株式会社

【協力・協賛】・協力小・中学校：明正小学校、稲田小学校、京西小学校、久地小学校、砧小学校、砧南小学校、桜町小学校、宿河原小学校、高津小学校、玉川小学校、玉堤小学校、等々力小学校、登戸小学校、東高津小学校、東深沢小学校、二子玉川小学校、稲田中学校、喜多見中学校、砧中学校、砧南中学校、瀬田中学校、玉川中学校、西高津中学校、東高津小学校、東深沢中学校、用賀中学校

・協賛企業・団体：カルピス株式会社、株式会社イザコーポレーション、株式会社サンジェルマン、株式会社フジックス、株式会社丸石サイクル、株式会社明治、株式会社ヤクルト本社、サッポロ飲料株式会社、世田谷区、ターナー色彩株式会社、日本電波塔株式会社、三菱東京UFJ銀行 以上12企業・団体

・当日参加企業：NTTデータアソシア、大和証券グループ、カルピス株式会社、東神開発株式会社、三菱東京UFJ銀行 以上5企業(50音順 敬称略)

・協力企業・団体：株式会社オンザウェイ、二子玉川商店街町内会、財団法人車両競技公益資金記念財団、公益財団法人世田谷区スポーツ振興財団

・広報協力：川崎市民活動センター こまえボランティアセンター 世田谷新聞社 世田谷ボランティアセンター

(敬称略・順不同)

ラブリバーたまがわこども絵画展とは



子どもたちがもっと自分たちに身近な多摩川を知り、親しんでもらい多摩川がきれいになることを願う心を養い、子どもたちがいつまでも多摩川を愛し次の世代にまで多摩川を愛する心を受け継ぐことのきっかけとすることを目的に、多摩川周辺の小学校から絵画を募集。二子玉川にある玉川高島屋にて展示、多摩川清掃大作戦時に表彰式を行っており、2011年度は第8回目になります。

2010年度は玉川高島屋の改修工事のため1年休止していましたが、2011年度もこれまで通り多くの子どもたちから出展いただくことができました。全員に絵画を画像データ化した絵が入った表彰状を作成し、表彰式では実行委員長で声優の神谷明さんはじめ、審査委員長の海津ヨシノリ先生(多摩美術大学勤務)、新井賢司さん(国土交通省京浜河川事務所副所長)に授与者を務めていただき和やかに執り行われました。今後も地域の子どもたちと多摩川をつなげる活動として継続していきます。

【主催】ラブリバーたまがわこども絵画展実行委員会

(ラブリバー多摩川を愛する会・NPO法人国際ボランティア学生協会)

【協力】玉川高島屋ショッピングセンター、東神開発株式会社

【参加小学校】世田谷区立砧小学校17点、世田谷区立玉川小学校129点、世田谷区立等々力小学校2点、世田谷区立二子玉川小学校23点、川崎市立稲田小学校16点、川崎市立久地小学校11点 計198点

竹林整備活動



【日時】2011年12月11日、2012年1月14日、2012年2月4日

【場所】神奈川県横浜市青葉区「児童厚生施設子どもの国」

【参加者数】計83名

【活動内容】竹林整備。

【成果】職員の人たちだけでは整備が追いつかない竹林の整備を行い、景観の改善を行った。

【課題・今後の方向性】今年度は月1回を目安に活動を行い、竹林の整備を行うとともに、園内の宿泊施設を利用して泊りがけの活動も行っていきたい。

【協力・協賛】児童厚生施設子どもの国

YURUSOU (ゆる〜い清掃キャンペーン)



【日時】2011年11月19日～11月27日

【場所】アメリカ、バンラデシュ、東京都内、京都市内等国内外27箇所

【参加者数】延べ1,181名

【活動内容】構えずに、軽い気持ちから清掃に取り組むことを促すキャンペーン。

【成果】・可燃306袋不燃132袋カン、ビン、ペットボトル156袋、合計594袋のゴミの回収。

・以前一緒に活動を行ったバンラデシュの大学生の参加協力、卒業生の参加協力もいただいた。

【課題・今後の方向性】より多くの参加を促す巻き込み方法や、キャンペーンに参加する意味の周知を検討していく。

地域活性化 自分の故郷を盛り上げたい。

新潟県関川村の伝統行事である「大したもん蛇まつり」の運営スタッフや、同県十日町市で行われる「十日町雪原カーニバル」の運営サポートなど、祭りのお手伝いや交流を主に行っています。

大学生ならではの柔軟な発想や新しい視点が地域活性化の現場には求められています。活動している地域は、災害救援を行ったところであったり、会員の出身地だったりしています。特に会員の「自分の故郷を盛り上げたい！」という思いや人の縁を大切にしています。

新潟県関川村「大したもん蛇まつり」活性化活動



【日時】2011年8月26日～8月29日

【場所】新潟県岩船郡関川村

【参加者数】IVUSA学生159名、OBOG20名

【活動内容】大したもん蛇祭りの運営のお手伝い、安全祈願祭、お茶の間ボランティア、交流会、保育園窓拭き、苔取り大作戦、村長と歩く大六散歩等。

【成果】・IVUSA参加者人数と村民の交流会参加人数がこれまでの活動の中で1番多かった。

・プロジェクト目標であった「また来よう関川」に対して、96パーセントの参加者がまた来たいという回答だった。

【課題・今後の方向性】継続していることでこの活動が出来ていることが当たり前になりつつある。ここで一旦原点回帰をし、活動が出来ている環境とこれまでの活動の歴史に対する理解を深め、年に1回のこのお祭りを学生の若さとパワーで思いっきり盛り上げる。

【協力・協賛】関川村役場、IVUSAサポーターズチーム、グループおりの



新潟県関川村「おいしいどもんこまつり」活性化活動



【日時】2012年2月10日～2月13日

【場所】新潟県岩船郡関川村

【参加者数】53名

【活動内容】どもんこまつり運営のお手伝い、雪像作り、雪山散策、前回提案ビジネスプランワーク、関川村スキー場体験。

【成果】・豪雪の影響もあり、どもんこづくりで学生の若さをパワーを発揮することができた。

・前回提案したビジネスプランを新しいメンバーがチームで引き継ぎ、村の方々と交えてブラッシュアップワークをおこなうことができた。

・全体スケジュールを見直したことで、交流会の時間がつくれ、村の方と学生1対1で、ゆっくり会話をすることができた。

・昼食作りのお手伝いをおして、普段なかなか会えない温泉旅館の女将さんやお母さんたちに料理のレシピなどを教えていただき交流を深めることができた。

・雪でつくるアイス企画やバレンタイン企画の準備をしていたため、子どもたちにも楽しんでもらえた。夏の活動で知り合った子どもも会いにきてくれた。

【課題・今後の方向性】どもんこまつりは、どもんこ（雪のかまくら）を完成させることが優先で若者のパワーが必要とされている。そういった、そもそものニーズ理解をした上で、村の方と学生が楽しめる企画を考えて提案していきたい。

【協力・協賛】関川村役場、IVUSAサポーターズチーム、大石・山と川に親しむ会



新潟県十日町市「十日町雪まつり」活性化活動



【日時】2012年2月17日～19日

【場所】新潟県十日町市県立十日町高校

【参加者数】32名

【活動内容】十日町青年会議所のお手伝いと露店販売、除雪ボランティア、巨大滑り台の安全管理、ゴミの分別、甘酒配布、茶室運営（案内）、福雪（受付、説明）、はてな（アドベンチャーブースの受付）、給水（水道が凍結した場所へ運ぶ）、露店（けんちん汁・鯨カレー販売）、国総研主催豪雪対応ワークショップ@清田山への参加（除雪ボランティア）。

【成果】今回の活動は、昨夏に発生した新潟・福島豪雨水害に対して十日町市で救援活動を行い、そのときに出会った(株)十日町青年会議所(以下JC)からの要請により実現した。JCの「地元の高校生の起爆剤になってほしい」というニーズに対して応えきれない部分もあったが、JCが開いてくれた交流会はお互いにとって密度の濃い時間となり、「ぜひ来年も来てほしい」と言ってもらい、災害でのご縁が絆へと近づいたと実感できた。

【課題・今後の方向性】・今回活動実施決定から当日までの期間が圧倒的に短く、「時間があればもっとできた」という部分も多少なりともあったため、来年度以降継続していく場合は、よりニーズに応えるためにも早い時期から動き出したい。

・「東京から大学生がボランティアにくるから私たちは行かなくていい」と、地元の高校生に思われず、むしろ「大学生と共に活動したい!」と思わせ、巻き込んでいく仕掛けが必要。十日町での他の活動にも積極的に巻き込んでいくことで少しずつ拡大していけるかがポイント。

【協力・協賛】社団法人十日町青年会議所（雪まつり特別委員会）、サンライズプロジェクト実行委員会

新潟県十日町市「雪原カーニバルなかさと」活性化活動



【日時】2012年3月9日～11日

【場所】新潟県十日町市中里地区

【参加者数】154名

【活動内容】雪原カーニバル運営補助（イベントスタッフ、シャトルバス添乗員）、キャンドルの設置・点灯、露店出店、歓迎モニュメント作成（雪像、雪の回廊・雪灯籠、雪だるまなど）、雪原イベント参加など、地元住民を招いた交流会。

【成果】・雪原カーニバルに「祈り」というテーマがあり、その想いを形にするべく作業をし、IVUSAが活動し始めた10年以上前からずっと支えてきた地元の方々も「今までで一番感動した」と絶賛していただいた雪のアートや回廊等を作成した。

・交流会では今まで以上に多くの地元の方々にご参加いただき、新しい繋がりを持つことができた。

【課題・今後の方向性】

・「きれいだった」で終わらない関係性づくり。今後のサンライズ・プロジェクトや十日町のイベントなどにつなげていく。

・宿泊先収容数の関係で現状150人が上限。1回のプロジェクト参加者数を増やすのではなく、十日町一東京間を定期的に運行しているグリーンバスなどを利用し、分散して年間参加者数を増やしていく。

・地元住民とIVUSAの雪原参画度のバランス。今後はサンライズプロジェクトを通して地元住民を巻き込んで、年間通して「みんなで作っていく」という雰囲気を作っていく。

【協力・協賛】雪原カーニバル実行委員会、元気印頑張隊R、十日町市役所中里支所、サンライズプロジェクト実行委員会

新潟県長岡市栃尾地区ふるさとづくり活動



【日時】 2011年4月～2012年3月まで全14回

【場所】 新潟県長岡市栃尾地区

【活動内容】 耕作放棄地の開墾、古民家修復、児童養護施設の子どもたちとの交流、祭り手伝い等。

【参加人数】 合計609名

【成果】 昨年度から活動の協力をしてもらっている栃尾同住会や、今年度から関わりをもった地元NPO法人の方や、祭りの手伝いをした地元の方々との繋がりを更に強くすることができた。

【課題・今後の方向性】 SNS・ホームページ等を通して、自分たちの活動をより外部に発信し、多くの人たちに知ってもらうことで、地域に根差した活動にしていきたい。

【協力・協賛】 栃尾同住会



- 第1回 4月9日～11日
- 第2回 5月27日～29日
- 第3回 6月10日～12日
- 第4回 7月8日～10日
- 第5回 8月1日～4日
- 第6回 8月26日～29日
- 第7回 9月2日～5日
- 第8回 9月22日～25日
- 第9回 10月7日～9日
- 第10回 10月21日～23日
- 第11回 11月11日～13日
- 第12回 11月25日～27日
- 第13回 2月10日～12日
- 第14回 3月10日～12日

6次産業化研修会



【日時】 第1回: 2011年11月19日～20日、第2回:2012年2月20日

【場所】 第一回:法政大学市ヶ谷キャンパス、第2回:国士舘大学世田谷キャンパス

【活動内容】 6次産業*の基礎知識や全国の活用事例とその留意点を学ぶ。

【参加人数】 合計20名

【成果】 ・今回の事業を通して、日本イベントプロデュース協会との繋がりを強くすることができた。

・研修会を受講した学生が将来地元に戻った際に、地域の地域活性化を考えるきっかけを作ることができた。

【課題・今後の方向性】 開催数に対する受講者数がまだ少ないので、広報、口コミ、SNS等を使い、参加者数を増やしていくことが求められる。

【協力・協賛】 一般社団法人日本イベントプロデュース協会



※6次産業とは、第1次産業に従事する農家や漁師が、生産・収穫した作物などを、生産だけでなく加工・販売まで一貫して手がける経営のこと。

災害救援 学生は微力だが、無力ではない。

1993年の北海道南西沖地震や1995年の阪神淡路大震災から、2011年の東日本大震災や台風12号水害まで国内外の様々な災害に対して、学生のマンパワーを活かした救援活動を行ってきました。東日本大震災救援活動はこれまで計21回、約2,000名のボランティアが現地で瓦礫の撤去、炊き出し、家屋の片づけなどの活動を行ってきました。

2011年度は東日本大震災以外にも多くの災害があり、IVUSAも東日本大震災と並行して、様々な地域で救援活動を行いました。

尚、「災害復旧援護に係るボランティア活動助成事業に関する協定」に基づき、公益財団法人車両競技公益資金記念財団からご支援を受けて実施しています。

平成23年7月新潟・福島豪雨災害救援活動



【日時】2011年8月4日～7日

【場所】新潟県十日町市

【状況】2011年7月26日から降り続いた雨により、新潟県及び福島県では河川の氾濫等が起き、全国で死者4名、行方不明者2名、床上浸水1221棟、床下浸水7804棟の被害が出た。

このような状況で、県は15の市町に対し、災害救助法を適用し、IVUSAは本協会OBが居住している十日町市において活動を行った。

【参加者数】46名

【活動内容】浸水被害があったお宅での、家財片づけ、ヘドロ掻きだし等。

【成果】19軒の被災家屋で、活動を行った。活動したお宅の友人の方が、IVUSAの東日本大震災での炊き出し活動にご協力してくれていた方で、小さな繋がりの中での、大きな恩返しができた。

【課題・今後の方向性】水害でのボランティアの活動は、何よりスピードが求められる。そのために、日頃からの訓練を行うとともに、活動地域との繋がりを大事にして、もしまた起きた時には今回よりも早く被災地へ行けるようにしたい。

【協力・協賛】十日町市社会福祉協議会



平成24年新潟県長岡市豪雪災害救援活動



【日時】2012年1月27日～1月30日、2月9日～2月13日

【場所】新潟県長岡市栢尾地区

【状況】大雪により、新潟県内では、人的被害347名（死者25名、重傷者116名、軽傷者206名）、住家被害87棟（全壊3棟、半壊1棟、一部損壊65棟、床上浸水1棟、床下浸水17棟）（3月6日新潟県発表）の被害が発生した。新潟県は災害救助法や県災害救助条例の適用基準を超えた地域に対し、災害救助法を適用した。

このような状況の中、社会福祉法人長岡市社会福祉協議会から本協会に対して豪雪災害に対するボランティア派遣の要請があり、活動を行った。

【参加者数】64名

【活動内容】独居老人宅、地区集会センターの除雪活動。

【成果】18軒の家で、生活通路、壁際の除雪などを行った。

【課題・今後の方向性】高齢化が進んだ地域では、ボランティアの手を必要とする人たちがいることはもちろんだが、除雪を仕事として生計を立てている人たちがいることも理解し、その人たちとボランティアでの住み分けを良く考えて活動を行っていく必要がある。

【協力・協賛】長岡市社会福祉協議会栢尾支所、特定非営利活動法人UNE



平成23年台風12号災害救援活動



- 【日時】1次隊 9月8日～19日 8名
- 2次隊 9月10日～19日 8名
- 3次隊 9月13日～19日 17名
- 4次隊 9月16日～19日 73名
- 5次隊 10月7日～9日 26名
- 6次隊 10月22日～23日 49名

【場所】三重県熊野市

【状況】台風第12号の影響で、西日本から北日本の広い範囲で記録的な大雨となった。全国で死者78名、行方不明者16名、床上浸水5,657棟、床下浸水19,152棟の被害が出た（消防庁調べ 11月2日）。

IVUSAの会員の祖母宅が三重県熊野市で被災したことから、同市での活動を開始した。

【参加者数】延べ181名

【活動内容】被災家屋の片づけ。

【成果】・75軒の被災家屋で家財運び出しや畳・床板上げ、ヘドロかき出しなどを実施。

・災害支援活動で出会った地域の方々からのお声掛けにより、地域の祭り等で活動を始めている。

【課題・今後の方向性】防災や地域活性化という視点で、中長期的な関係を築いていきたい。

【協力・協賛】社会福祉法人三重県熊野市社会福祉協議会

三重県熊野市流木撤去活動



【日時】2012年2月14日～17日

【場所】三重県熊野市

【参加者数】延べ114名

【活動内容】海岸に漂着した流木の撤去

【成果】・400m×20mの海水浴場に、台風により打ち寄せられた流木をすべて撤去。

・災害支援活動で出会った地域の方々からのお声掛けにより、地域の祭り等で活動を始めている。

【課題・今後の方向性】防災や地域活性化という視点で、中長期的な関係を築いていきたい。

【協力・協賛】・主催：大泊海水浴場復活！プロジェクト実行委員会（大泊地区、熊野レストレーション、IVUSA）

・後援：三重県、熊野市

IVUSA危機対応研究所

IVUSAは災害救援活動の現場で培ってきたノウハウや、スキル、安全管理の考え方をベースに人間の営みすべてに存在する危機を分析・研究し、その対策を一般に分かりやすく解説していくために、IVUSA危機対応研究所を設立しました。CMT（Crisis Management Training=危機対応講習）の実施と、災害時要援護者の避難支援に関する研究事業を行っています。

CMTには初級、中級、上級、安全管理、インストラクター講座があり、初級講座では、誰もが身につけておくことが必要と思われる応急救命措置や身の回りの危機に対処する方法を学んでいきます。中級では身の回りの危機や災害のメカニズムといった危機知識の習得や、チームで行動することについて学びます。上級では更に広い視点での危機知識の習得、チームリーダーとして必要な素養を修練します。安全管理では、リスクアセスメントやダメージコントロールといったマネジメントについて、インストラクター講習では危機対応を習得し、実践で活躍できる人材の養成を図ります。

各講習は、実技、座学、ワークショップ、図上演習、想定訓練といった複合的なカリキュラム内容となっています。

CMT (Crisis Management Training)

【初級講座】

日時:4/3、5/3、5/4、5/12、5/13、5/14、5/18、5/21、5/22、5/28、5/29、
6/4×3回、6/5×3回、6/11×2回、6/12×2回、6/18、7/2、7/3×2回、7/9、7/10、
7/30、8/6、8/21、8/24、9/7×2回、10/23、11/1、11/13、11/19、2012/1/14、
1/22、2/6、3/10（合計41回開催）。

場所:各大学クラブ内施設、教室等

受講者数:合計906名。

【中級講座】

第1回:2011年5月3日～4日 国士舘大学世田谷キャンパス 40名受講

第2回:2011年9月12日～13日 岩手県一関市藤沢町大籠小学校 13名受講

第3回:2011年12月3日～4日 滋賀県東近江市蛭谷町木地師やまの子の家 25名受講

【上級講座】

日時:2012年3月17日～18日

場所:国立信州高遠青少年自然の家

受講者数:40名

【インストラクター講座】

第1回:2011年5月2日～4日 国士舘大学柴田会館 21名受講

第2回:2012年3月27日～29日 国士舘大学柴田会館 18名受講

インストラクター合格者:20名、アシスタント:19名



大規模災害時における災害時要援護者の避難支援に関する調査研究事業



2007年度から行っていた調査研究事業は、2期目2年目の取り組みとして個人の避難支援プランを作るべく個別のヒアリング調査活動にむけた準備を行ってきた。しかし、3月11日に発生した東日本大震災により、災害時要援護者の避難支援に対する考え方や方法に大きな影響があるであろうという考えのもと、被災地域の住民に対して400件以上の聞き取りアンケートを行い、地元関係機関に対してヒアリングを行った。

東日本大震災は市民や災害時要援護者自身の防災意識を大いに向上した。そのため、関係機関や自治会等の把握する個人情報に基づく災害時要援護者へのアプローチだけでなく、災害時要援護者自身または家族への直接的なアプローチが容易になった。今後はこの両方向からのアプローチを通じて個別の避難支援プラン作りに向けた調査活動を行っていく。

その他の事業

国際協力、環境保護、地域活性化、災害救援の他にもIVUSAは様々な事業を行っています。

SAT(Social Action Team)～大学生のための社会貢献講座

●第18回 藤沢久美さんから学ぶ！新たな社会システムを創出する社会企業家達☆

講師：シンクタンク・ソフィアバンク 副代表 藤沢久美氏

日時：5月26日 参加者：33名

●第19回 若き都議に聞く、「これからの東京、これからの日本」

講師：東京都議会議員 伊藤ゆう氏

日時：6月28日 参加者：38名

●第20回 国際協力を仕事に！夢を実現するキャリアステップとは！？

講師：独立行政法人国際交流基金 奥裕子氏

日時：9月28日 参加者：39名

●第21回 海外の現場で働くということとは？海外開発コンサルから学ぶ“ソーシャル・キャリア”の作り方

講師：株式会社かいはつマネジメント・コンサルティング 岡部寛氏

日時：10月28日 参加者：61名

●第22回 元アップルコンピュータ（現アップルジャパン）社長が語る仕事で結果を残す人・世界のトップで活躍する人材とは？

講師：コミュニカ有限会社代表取締役 山元賢治氏

日時：11月24日 参加者：71名

●第23回 クックパッドを上場に導いた女性執行役員が学生に送る 「自分らしい生き方」を切り開く原動力とは？

講師：クックパッド株式会社執行役社長室長 小竹貴子氏

日時：12月20日 参加者：58名

●第24回 元アップルコンピュータ（現アップルジャパン）社長が語る仕事・世界のトップで活躍する人材とは？

講師：コミュニカ有限会社代表取締役 山元賢治氏

日時：1月10日 参加者：68名

●第25回 震災が起きた今こそ考える。ワカモノが日本の将来を明るく照らしていくには何が求められるのか？

講師：環境エネルギー政策研究所(ISEP) 所長 飯田哲也氏

日時：2月3日 参加者：33名

●第26回 多彩な感性を持ち鋭く現代社会のあり方を問い続ける記者が伝えるメディアの社会貢献とは？

講師：朝日新聞社 生活グループ記者 高橋美佐子氏

日時：3月26日 参加者：44名



【場所】東京都内、京都府内

【活動内容】講演会、ワークショップ。

【参加人数】延べ445名

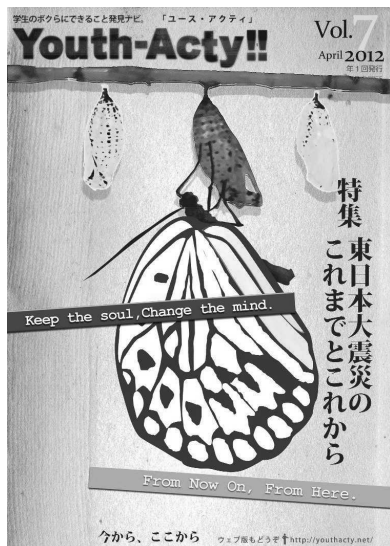
【コーディネーター】風間ゆたか（世田谷区議会議員・IVUSA理事）

【成果】講演会を通して、様々な分野の第一線で活躍している方とパートナーシップを築くことが出来た。

・運営に関わっている大学生が、年間をとおして多くの社会人と接しながら講演会を作り上げていく過程において、コミュニケーション能力や課題解決能力を向上させ、仕事を進めていく上での基本的なマインドを学ぶことが出来た。

【課題・今後の方向性】自分自身が社会で何をテーマに働いていくのかを考えるきっかけとなっているため、学年問わず、多くの学生の参加を促していく。

フリーペーパー「Youth-Acty!!」発行



【仕様】A4サイズ32ページ（フルカラー）のフリーペーパーを年間15,000部発行
ウェブサイト版：<http://youthacty.net/>

【配布場所】関東（東京・神奈川・千葉・埼玉）、関西（大阪・京都・兵庫・奈良）
大学、ボランティアセンター、飲食店、美容院、書店などへのラック設置、直接配布

【内容】東日本大震災で浮き彫りにされた私たちの生きる社会の抱える課題とその本質的・構造的な原因に対する認識を深め、今後、私たちがどのようなライフスタイルやソーシャルスタイルを選択していくべきかについて考えるきっかけや道しるべを提供する。

【成果】・東日本大震災の復興支援を行っている様々な団体・個人とネットワークを構築することができた。

・編集作業に携わった学生の企画力やライティング能力が向上した。

【課題・今後の方向性】大学生を含めた若者世代からの政策提言的な内容にしていく。

厚生労働省主催 平成23年度硫黄島戦没者遺骨帰還事業協力



【日時】2011年11月29日～12月7日、2012年2月6日～2月15日

【場所】東京都硫黄島

【参加人数】IVUSA会員延べ4名、一般公募受付17名

【内容】厚労省主催の戦没者遺骨収集・帰還事業の参加者派遣と公募窓口業務。

【成果】戦没者458柱の収容、一般公募者からIVUSA支援者2名獲得、参加会員と一般参加者が時候の挨拶を交わす繋がりができた。

【課題・今後の方向性】厚生労働省の事業が継続する間は協力を継続、会員内にも現代史を考える機会として発信していきたい。

【協力・協賛】主催:厚生労働省、協力:IVUSA

世田谷区市民活動支援コーナー管理運営受託



【日時】通年

【場所】世田谷区三軒茶屋キャロットタワー三階

【内容】主に世田谷区内で活動している市民活動団体へ、打ち合わせや講義に使えるスペースの貸出や印刷機材の貸し出し等の施設運営。

【成果】・延べ3,000件、15,000人の利用、48団体の新規と利用登録申込があった。

・支援コーナー運営以外に行っている市民活動相談事業では11団体からNPO関連や団体運営設立などの相談がありアドバイス、サポートをおこなった。

【課題・今後の方向性】世田谷区内で活動をされている各団体の便宜を図っていくとともに、首都直下型大規模震災発生時に各団体の特色を活かした、連携し合える緩やかなネットワークを構築していく。

日韓青少年共同ボランティア活動事業協力



【日時】

- ・訪日プログラム：2012年2月11日～2月17日
- ・訪韓プログラム：2012年2月21日～2月27日

【場所】

- ・訪日プログラム：東京都内、三重県熊野市、兵庫県神戸市
- ・訪韓プログラム：大韓民国京畿道ソウル市、江原道春川市、江原道江陵市、江原道洛山市

【参加人数】日本人学生34名、韓国人学生34名

【活動内容】・日本や韓国の災害の種類や備えや対応体制について有識者によるセミナー

- ・防災をテーマとした日韓学生のディスカッション
- ・三重県熊野市七里御浜で台風12号により出水で流され打ち上げられた流木の撤去
- ・大韓民国江原道雪岳山での除雪作業
- ・上記活動をとおした日韓学生交流

【成果】・日韓68名の学生がセミナーやディスカッションやボランティアなどをおして防災について意見交換して考える機会を持ち、交流での繋がりを両国で発生する緊急時の際にお互い役立てていこうという機運を作ることができた。

- ・三重県熊野市七里御浜で流木約5トンの撤去。
- ・大韓民国江原道雪岳山で山道約1キロの除雪。
- ・参加した学生たちの中から自発的にFacebook内に参加者コミュニティが立ち上がり、コミュニケーションや写真の共有が行われている。

【協力・協賛】主催:財団法人日韓文化交流基金、企画:株式会社JTB法人東京法人営業池袋支店、協力:IVUSA

【課題・今後の方向性】・内容のジャンルは問わず、地域や社会から必要とされている事業をおして交流が行える企画を日韓の学生が協働して開発していく。

- ・韓国学生の安定的定着とそのため韓国側組織整備と活動展開。2004年黄土高原植林で実施したような日中韓3国の学生の協働事業など機会を提供する。
- ・交流を通してチング(親友)となった日韓学生同士を、パートナーとしていくような流れや意識付けとその仕掛けや企画を行う。



学生お助けボランティア

【日時】 通年

【場所】 世田谷区内

【参加人数】 11名

【内容】 家具の移動、草取り、窓拭き、部屋の片づけ、パソコン教室、庭清掃など。

【成果】 ・東日本大震災災害救援活動を最優先に取り組む中で、62件のニーズに対して活動を実施。

依頼者（高齢者）もスタッフ（学生）も、作業をしながら対話を交流を深めた。

・今年度10年目を迎えますが、事業の継続により広報活動をおこなわなくても、区役所・社会福祉協議会、介護事業所などから依頼の連絡が入るようになった。

【課題・今後の方向性】 お助けボランティアスタッフ不足にならないように人材育成に取り組みつつ、ニーズに対して、責任ある活動を行っていく。

イベント等への出展



- 【イベント名】ECOパーク2011
- 【日時】2011年6月4日～5日
- 【場所】NHK放送センター
- 【活動内容】環境に関する活動展示や体験ワークショップ
- 【協力・協賛】主催：NHK



- 【イベント名】Beyond2011～つなげる想い、つながるチカラ～
 - 【日時】2011年9月16日～19日
 - 【場所】国立オリンピック記念青少年総合センター
 - 【活動内容】基調講演・各種ワークショップ・プロジェクト作り、コンテストなど
- ※IVUSAは実行委員団体の一つとして参加
詳しくは：<http://project.eco-2000.net/beyond/>



- 【イベント名】慶應義塾大学三田祭講演会「ポスト3.11～僕たちの未来戦略～」
- 【日時】2011年11月23日
- 【場所】慶應義塾大学三田キャンパス
- 【活動内容】首都大学東京教授・宮台 真司氏の講演会

夏休み体験ボランティア2011inちよだでの活動プログラム提供



- 【日時】2011年8月8日～9日
- 【場所】ちよだボランティアセンター
- 【活動内容】環境に関する活動展示や体験ワークショップ
- 【参加人数】45名
- 【協力・協賛】主催:千代田区社会福祉協議会

メディア報道記録

【新聞】

- 2011年4月15日付毎日新聞 東日本大震災6次隊
- 2011年4月30日付世田谷新聞 東日本大震災3次隊
- 2011年5月18日付毎日新聞 東日本大震災9次隊
- 2011年5月20日付毎日新聞 東日本大震災9次隊
- 2011年6月1日付読売新聞 シンデレラプロジェクト
- 2011年8月4日付新潟日報 2012年度第5回新潟県長岡市栃尾地区ふるさとづくり活動
- 2011年8月20日付熊本日日新聞 第5回熊本県天草市流木除去・清掃活動
- 2011年8月27日付東京新聞千葉版 第10回九十九里浜全域清掃大作戦
- 2011年8月29日付朝日新聞新潟版 「大したもん蛇まつり2011」活性化活動
- 2011年9月5日付日本農業新聞 「大したもん蛇まつり2011」活性化活動
- 2011年9月10日付市報十日町 平成23年7月新潟・福島豪雨災害救援活動
- 2011年9月18日付吉野熊野新聞 平成23年台風12号災害4次隊
- 2012年2月14日付中日新聞 平成23年台風12号災害流木撤去活動
- 2012年2月14日付吉野熊野新聞 平成23年台風12号災害流木撤去活動
- 2012年2月14日付南紀新報 平成23年台風12号災害流木撤去活動
- 2012年2月15日付伊勢新聞 平成23年台風12号災害流木撤去活動
- 2012年2月15日付朝日新聞 平成23年台風12号災害流木撤去活動
- 2012年2月16日付吉野熊野新聞 平成23年台風12号災害流木撤去活動
- 2012年2月28日付バイオンTV、SEATV 第4次カンボジア学校建設活動
- 2012年2月29日付Raksmev Kampuchea Daily 第4次カンボジア学校建設活動

【テレビ・ラジオ】

- 2011年6月12日NHKラジオ第1 東日本大震災救援活動
- 2011年9月10日FM横浜 東日本大震災救援活動
- 2011年9月23日bayfm 東日本大震災救援活動
- 2012年1月17日NHK-FM 東日本大震災救援活動
- 2012年1月20日J-WAVE 東日本大震災救援活動
- 2012年2月15日NHK 平成23年台風12号災害流木撤去活動
- 2012年2月15日CBC 平成23年台風12号災害流木撤去活動
- 2012年2月28日バイオンTV (カンボジア) 第4次カンボジア学校建設活動
- 2012年2月28日SEATV (カンボジア) 第4次カンボジア学校建設活動



2011年8月27日付東京新聞



2012年2月16日付吉野熊野新聞

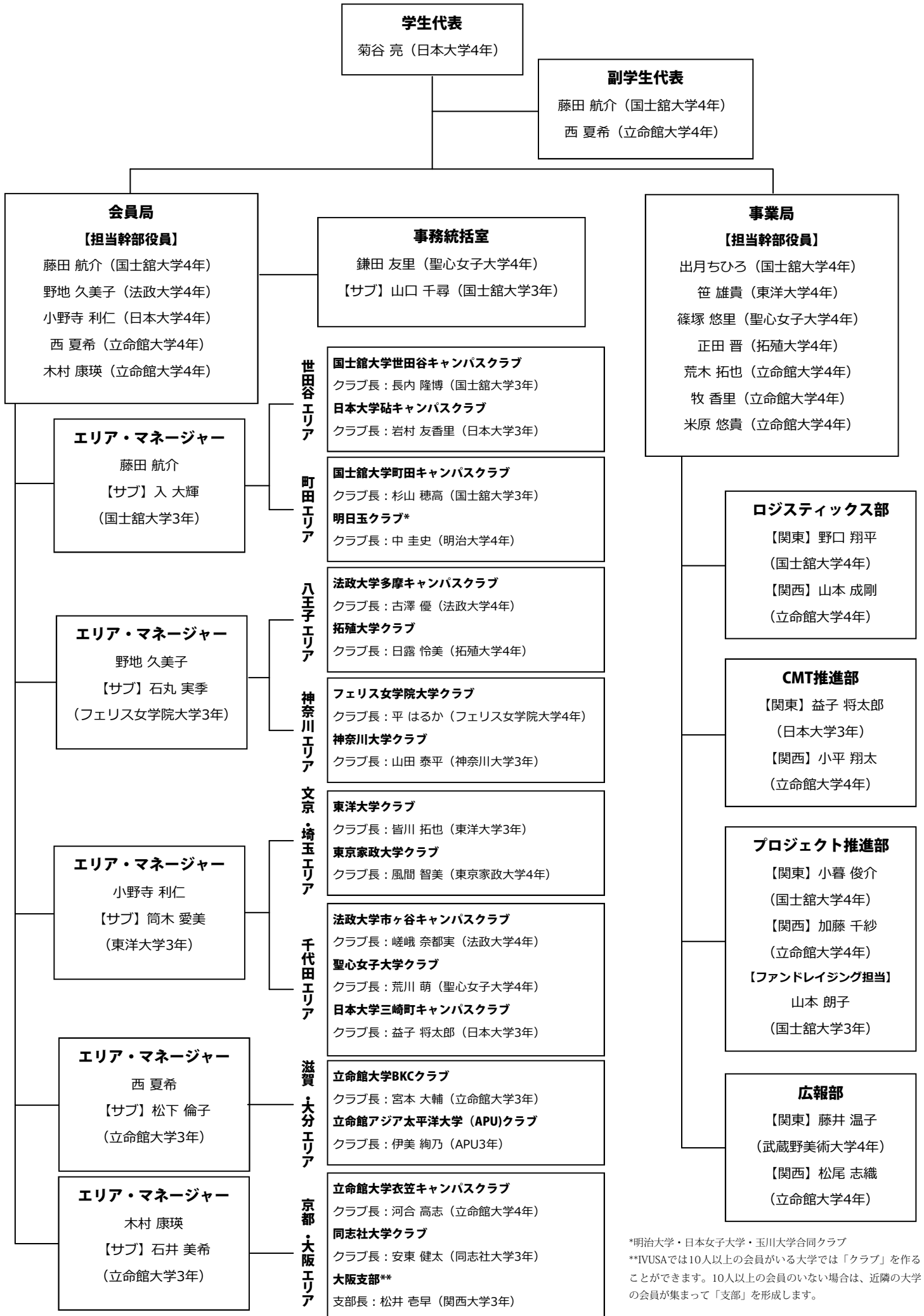


2011年6月1日付読売新聞



2012年2月15日付朝日新聞

2011年度（19期）学生組織図



*明治大学・日本女子大学・玉川大学合同クラブ
 **IVUSAでは10人以上の会員がいる大学では「クラブ」を
 することができます。10人以上の会員のいない場合は、近隣の大学
 の会員が集まって「支部」を形成します。

研修 Learning in Action , Learning for Action

IVUSAでは、現場での活動だけでなく、それを補完する様々な研修プログラムがあります。就職環境が年々厳しくなっている現在、単に「学生時代、ボランティア活動を頑張ってきました」ということだけでなく、活動や経験を通して自分が何を感じ、どう成長したのかを自分の言葉で人に伝えられるようになることが大切です。

そして、学生自身が自分たちの生きているこの社会に対し、当事者意識（オーナーシップ）を持ってそこにある課題を解決し、持続可能な未来を創っていきける資質や能力を身に付けていくことを目指しています。

また、IVUSAは現場第一主義であり、研修はあくまで現場でよい仕事をするためのことであり、研修のための研修にならないように気を付けています。

具体的には、全体の定例会や、合宿、大学クラブのクラブ会などで様々なプログラムを実施しています。

■定例会

東日本ブロック定例会

- ・2011年6月19日 東京都世田谷区 国士舘大学世田谷キャンパス 380人参加
- ・2011年10月15日 東京都世田谷区 日本大学砧キャンパス 205人参加
- ・2012年2月6日 東京都世田谷区 国士舘大学世田谷キャンパス 220人参加

西日本ブロック定例会

- ・2011年7月2日 京都府京都市 キャンパスプラザ京都 209人参加
- ・2011年9月24日 京都府京都市 キャンパスプラザ京都 165人参加
- ・2011年10月22日 滋賀県草津市 立命館大学びわこ・くさつキャンパス 79人参加
- ・2012年1月15日 京都府京都市 キャンパスプラザ京都 120人参加

■合宿

- ・西日本ブロック春合宿（京都・大阪） 2011年6月11日～12日 京都府南丹市 京都府り溪少年自然の家 147人参加
- ・西日本ブロック春合宿（滋賀・大分） 2011年6月4日～5日 滋賀県蒲生郡 希望ヶ丘文化公園 118人参加
- ・役員合宿 2011年12月26日～28日 東京都世田谷区 国士舘大学世田谷キャンパス 106人参加
- ・20期（2012年度）キックオフ合宿 2012年3月16日～19日 長野県伊那市 国立信州高遠青少年自然の家 110人参加

■新人研修

新規会員向けに自己理解や他者理解を目的としたゲーム型のワークショップを、大学クラブごとで実施しました。

■役員・スタッフ研修

定例会の前に役員・スタッフ向けの研修を実施しました。



2012年度から、研修プログラムを以下の3つに体系化します。

(1) HRT (Human Relation Training) ゲーム型・ワークショップ型のプログラムを通して自己理解や他者理解を深め、コミュニケーション力を養います。

(2) SAT (Social Action Training) 社会が抱える問題の現状や原因を、IVUSAが行っている事業と関連のある分野（国際協力、環境保護、地域活性化）を中心に学んでいきます。ただ学ぶだけでなく、ゼミのような形で研究や調査を行い、IVUSAの現場の活動にフィードバックをしています。

(3) CMT (Crisis Management Training) 応急救命措置を基礎に、身の回りに起こりうるリスクから、大きくは日本や世界が抱える危機の他、チームビルディングやマネジメントについても学びます。IVUSAのリーダーシップ・トレーニングの核となっています。

■IVUSAが身に付けてもらいたいと考えているマインド&スキル

①すべての基礎としての自己理解・他者理解

経済産業省では、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」を「社会人基礎力」と定義しましたが、それらは大きく「前に踏み出す力（アクション） 一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力」「考え抜く力（シンキング） 疑問を持ち、考え抜く力」「チームで働く力（チームワーク） 多様な人々とともに、目標に向けて協力する力」の3つに分かれています。

この中でもIVUSAはチームで働く能力=コミュニケーション能力を重視しており、その土台は自己理解と他者理解であると考えています。

プロジェクトやクラブ運営においては、多様な価値観や考え方をもち、ポジションや立場も違う人たちと一緒にプロジェクトを作り上げていくことが求められます。

そこには、「お客さん」ではなく「作り手」として関わっていきます。失敗や挫折も含むこのプロセスが大学の授業やシミュレーション的なワークショップにはない学びの場となるのです。

②社会性だけでなく社会力も

筑波学院大学元学長の門脇 厚司氏は、著書『子どもの社会力』（岩波新書）の中で以下のように述べています。

私は、社会的動物ないし社会的存在たるに相応しい人間の資質能力を「社会力」と呼ぶことにした。いまや、心理学の専門用語になっている感のある「社会性」なる用語が、既にある社会に個人として適応する側面に重きをおいた概念であるのに対し、「社会力」には、一つの社会を作りその社会を維持し運営していく力という意味を込めている。

このような用語を作り用いようとしたのは、わが国の若い人々に欠けているのは社会への適応力というより、自らの意思で社会を作っていく意欲とその社会を維持し発展させていくのに必要な資質や能力であると考えているからである。

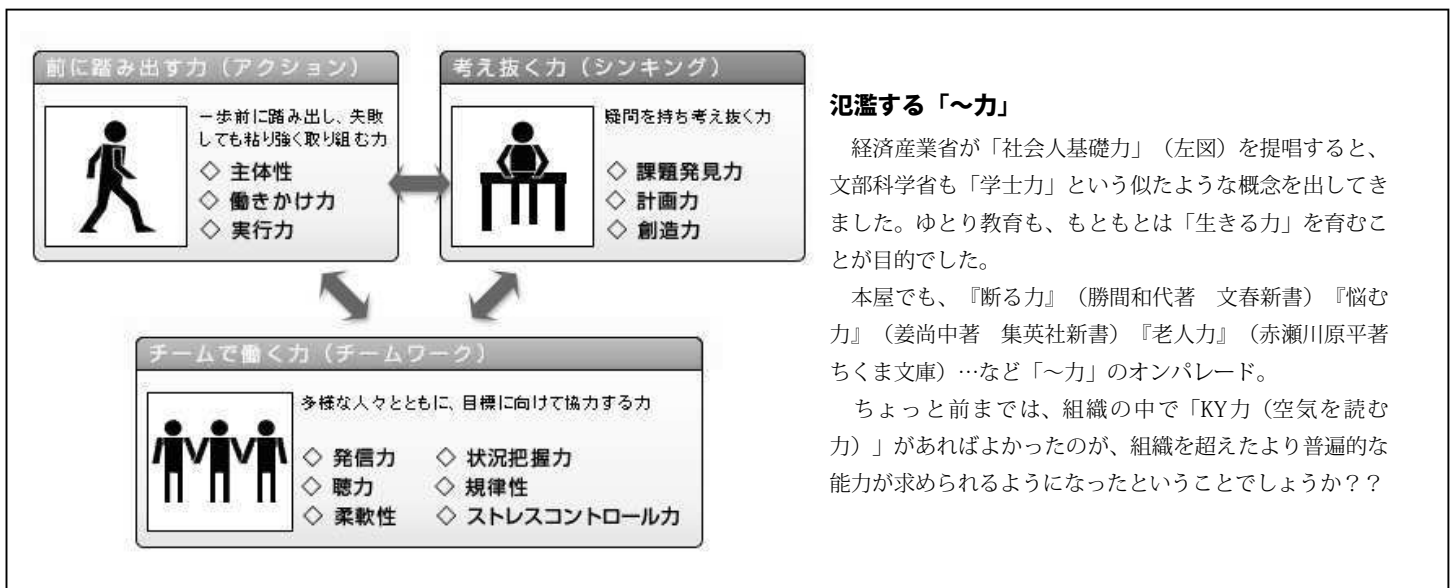
プロジェクトの背景にある社会問題の勉強会を通して、学生一人ひとりが「自分ごと」と捉えてもらえるようなサポートをしています。

③目の前に倒れている人に「大丈夫ですか？」と声を掛けることができるか？

IVUSAでは全会員に応急救命を中心としたCMT（危機対応講習）を必修にしています。

災害大国である日本では、誰もが被災者になる可能性があります。被災した時に、一人でも多くの方が「救助者」になることが重要であり、そのためにも大学生を含め多くの若者が被災地での救援活動に参加し、災害現場を体験することが必要不可欠であると私たちは考えています。

その他にも何かプロジェクトを行う際には、そのプロセスにどのようなリスクがあるかを想定し、対応策を考えていきます。ただ、そのようなリスク・マネジメントを突き詰めれば、「何もしない方がいい」という結論になります。あくまで「夢」や「志」を実現するためのリスク分析であるということをIVUSAでは強調しています。



【コラム】「ゆとり」のホンネ

今の若者は夢が無い、希望が無い、そして覇気がない。このようなことは何年も前から、いわゆる大人の中で（勝手に）言われ続けていることである。

それを反論したいのか、と問われると、何も言うことができない。言う気が無い、やや面倒であるというのが本音かもしれない。そして、若者が夢を見ることのない社会を創った大人が悪いのだ、と騒ぐ気もない。大人の若者批判は昔からあるが、近年はいわゆる「ゆとり世代」への風当たりが強い。4月になると判で押したように、「実録！迷惑なゆとり社会人！」というような記事が週刊誌、ファッション誌問わず紙面に並ぶ。

果たしてゆとり世代の何がそれほどまでに罪なのか。大人が悪い、教育が悪い、不景気が悪い、と言ってしまふのは簡単だが、それだけではないと考えたい。今の若者はモノに不自由せず、そして情報が溢れる中で育った。不況の影響で高卒の就職率が低下したこともあり、大学進学率は50%を越えた。手を伸ばせば、目に見えるものの殆どが手に入る中で育ったのだ。

それは幸せなことなのであろうか。多すぎるモノや情報の中から選択をすることが上手く出来ず、何となくで流されてしまう若者を作った。何となく大学に進学し、何となく友人をつくる。

その延長線上で何となくで就職したいが、就職活動を始めると、人生で初めて自分の意思を要求される。何となくで育ってきた若者には荷が重すぎる。だからといって、大学が彼らを助けてくれるのか、というところではないらしい。今の大学では就職のためと称して、なんと小学校で習った算数の復習を授業として行うことがあるらしい。正直、小学校で習う算数の復習のようなことよりも大切なことが大学生活にはあるように感じてしまう。

では、大学生活に大切なこととは何か。それは自分の目で見て、耳で聞いて、経験することであると思う。そして、その経験により、自分の価値観を形成し、自らの足で立ち上がり、挑戦することである。

それが社会活動でなくても構わない。留学でも、旅でも、趣味であってもそれは大いに価値を持つ。そして、自分の意思で、これだと思えることに挑戦をする。その経験は、自分自身を創ることが出来る。

そして、実際の経験はどんな情報をも超える。果たして今までに外国人と国際問題について議論したことがあるか。地震で壊れた家屋を目にしたことがあるか。孤独死を隣に感じながら生活をする人に手を差し伸べたことがあるか。

これらの問題はメディアを賑わし、その情報によって多くの人は顔をしかめ、批判をする。批判をするのは大いに結構だが、はたして問題に真摯に向き合ったことがあるのかと問いただけたくてしまうのは私だけだろうか。批判をする根拠がマスメディアやインターネットだけだということならば、あまりに浅はかだろう。

ところで、私は、いわゆる「ゆとり世代」の若者だ。しかも、実験体一号ならぬ、ゆとり一期生である。そして今、大人が忌み嫌う「実録！迷惑なゆとり社会人」を満喫しているらしい。希望のないゆとり世代を批判し、哀れむ大人には申し訳ないが、私は大変幸せだ。自分の意思で仕事を選び、社会に挑戦しているからである。

大学生時代にIVUSAの活動で、仲間と世界を飛び回った。そしてそのことで様々なものを見て、感じた。被災したことで初めて隣人との人間関係の希薄さを感じる老人。学ぶことが嬉しく、毎日笑顔で学校へと急ぐカンボジアの子どもたち。どこかに溢れていた情報ではなく、これは自分の目で見て感じた経験だ。

私たちは、今すぐに社会を変えることは出来ないだろう。だが、IVUSAは社会を変える意思を持つ、流されることなく挑戦を続ける「中身をもった人間」を創りだしていると社会に出てから感じるのだ。

(IVUSA17期卒業生)

2011年度収支決算

収入の部

(単位：円)

科目	金額
会費収入	
学生会員会費	18,997,500
賛助会員会費	337,680
OB・OG会員会費	740,440
法人会費	110,000
事業収入	
発展途上国や、貧困に苦しむ地域での住宅建設、小学校建設、井戸や家畜小屋など諸施設建設に関する国際貢献事業収入（カンボジア学校建設・インド住宅建設など）	19,154,738
砂漠化の進む地域や緑化推進地域での植林・森林保護に関する環境保護事業収入（中国緑化プロジェクト、里山保全活動など）	7,913,190
被災地への人数派遣による復興支援活動の実施、災害に備えた各種研修講習会の開催に関する事業収入（東日本大震災救援活動、日韓青少年共同ボランティア事業、危機対応講習など）	15,534,521
都市及び地域の環境美化・清掃活動に関する事業収入（九十九里浜全域清掃大作戦、天草流木撤去活動、多摩川清掃大作戦など）	15,473,983
各企画参加者等に対する勉強会や合宿に関する事業収入（大学生のための社会貢献講座、国際協力ワークショップなど）	254,537
各地域で活動を行っているボランティア団体等との連携に関する事業収入（新潟県における地域活性化事業、世田谷区市民活動支援コーナー運営など）	21,972,239
その他本会の目的を達成するために必要な事業収入（戦没者遺骨収集活動、学生お助けボランティアなど）	1,637,688
事務手数料	6,118,381
助成金	
公益財団法人車両競技公益資金記念財団	19,222,000
公益財団法人大阪コミュニティ財団	1,000,000
財団法人千葉環境財団	1,918,000
銀河鉄道東京都助成金	275,000
三井住友海上火災保険株式会社	200,000
業務委託費	
公益財団法人 せたがや文化財団	6,550,000
寄付金	
	14,041,921
雑収入	
利息	3,096
当期収入合計	151,454,914
前年度繰越金	18,244,214

支出の部

(単位：円)

科目	金額
事業費	
発展途上国や、貧困に苦しむ地域での住宅建設、小学校建設、井戸や家畜小屋など諸施設建設に関する国際貢献事業費（カンボジア学校建設・インド住宅建設など）	18,245,126
砂漠化の進む地域や緑化推進地域での植林・森林保護に関する環境保護事業費（中国緑化プロジェクト、里山保全活動など）	7,473,106
被災地への人数派遣による復興支援活動の実施、災害に備えた各種研修講習会の開催に関する事業費（東日本大震災救援活動、日韓青少年共同ボランティア事業、危機対応講習など）	46,951,974
都市及び地域の環境美化・清掃活動に関する事業費（九十九里浜全域清掃大作戦、天草流木撤去活動、多摩川清掃大作戦など）	13,969,863
各企画参加者等に対する勉強会や合宿に関する事業費（各大学クラブへのサポート、各種研修、ボランティア保険、大学生のための社会貢献講座、国際協カワークショップなど）	7,306,426
活動報告会や広報誌の作成に関する事業費（活動報告会、フリーペーパー「Youth-Acty!!」発行、ウェブ管理など）	5,284,139
各地域で活動を行っているボランティア団体等との連携に関する事業費（新潟県における地域活性化事業、世田谷区市民活動支援コーナー運営など）	18,685,758
その他本会の目的を達成するために必要な事業費（戦没者遺骨収集活動、学生お助けボランティアなど）	1,241,682
事業費合計	119,158,074
運営管理費	
給料手当	4,316,000
旅費交通費	1,061,441
家賃	3,313,560
支払手数料	34,070
消耗品費	191,979
図書印刷費	92,841
諸会費	222,250
通信費	112,353
渉外活動用通信費	425,594
会議費	659,794
会合費	51,530
慶弔費	196,924
租税公課	3,391,820
器具備品費	624,329
保険代	434,354
雑費	117,740
荷造り運搬費	304,992
水道光熱費	186,919
運営管理費合計	15,738,490
当期支出合計	134,896,564
当期収支差額	16,558,350
次年度繰越金	34,802,564

尚、次年度繰越金の中には以下のものを含まれます。

事業基金 6,625,764円

夢企画基金 309,001円

アジア教育支援募金 3,717,287円

法人概要

■本部事務局

〒156-0051
東京都世田谷区宮坂1-34-4 ザ・アゼリアハウス B号棟102号室
電話/FAX 03-6751-2683 E-mail ivusa-office@ivusa.com
ホームページ <http://www.ivusa.com>
facebook <http://www.facebook.com/npoivusa>
Twitter @IVUSA_OFFICE
職員 常勤6人、非常勤7人（学生インターン2人）

【京都事務所】

〒607-8075
京都市山科区音羽野田町27-7-1
E-mail kansai@ivusa.com

■理事

下村 誠（代表理事）
藤本 行和（東京消防庁新宿消防署救急隊長）
中嶋 信行（マイクロソフト株式会社）
風間 穰（東京都世田谷区議会議員）
伊藤 章（NPO法人市民教育のための
サービス・ラーニング・クリアリングハウス事務局長）
桑原 望（新潟県長岡市議会議員）
赤木 衛（特定非営利活動法人ジェイワイエムエイ理事長・
株式会社東京アイデアフォース代表取締役社長）
阿部 博志（株式会社ダイテックス代表取締役）
宮崎 猛志（IVUSA危機対応研究所 所長）
外木 絢子（IVUSA学生組織担当理事）

■監事

星 昭良（SPK株式会社）

■会員の所属大学一覧

国士舘大学、立命館大学、東洋大学、日本大学、法政大学、拓殖大学、龍谷大学、神奈川大学、同志社大学、聖心女子大学、フェリス女学院大学、関西大学、中央大学、東京家政大学、立命館アジア太平洋大学、文京学院大学、日本女子大学、玉川大学、明治大学、共立女子大学、実践女子大学、専修大学、滋賀大学、京都外国語大学、同志社女子大学、大妻女子大学、青山学院大学、創価大学、津田塾大学、共立女子短期大学、成城大学、帝京大学、東海大学、明治学院大学、学習院大学、京都産業大学、国立音楽大学、昭和女子大学、成蹊大学、清泉女子大学、東京理科大学、東洋英和女学院大学、ヤマザキ学園大学、宇都宮大学、横浜市立大学、京都女子大学、京都大学、京都文教大学、金沢大学、駒澤大学、慶応義塾大学、甲南女子大学、国際武道大学、十文字学園女子大学、淑徳大学、上智大学、新潟工科大学、新潟産業大学、神戸大学、相山女学園大学、青山学院女子短期大学、跡見学園女子大学、相模女子大学、大阪大学、大阪府立大学、帝京平成大学、東京医科大学、東京医療保健大学、東京学芸大学、東京国際大学、東京女学館大学、東京女子大学、日本経済大学、梅花女子大学、白百合女子大学、武庫川女子大学、武蔵野美術大学、文教大学、明治国際医療大学、明治薬科大学、目白大学、立教大学、流通経済大学、和光大学、國學院大学（以上85大学108キャンパス）

■設立

1993年
NPO法人設立：2002年4月（認証：東京都）

■顧問

弓削 昭子（国連開発計画駐日代表・総裁特別顧問）
野中 広務（元衆議院議員）
小田 兼利（日本ポリグル株式会社代表取締役会長）
長島 忠美（衆議院議員 元山古志村村長）
山村 武彦（防災システム研究所所長）
市川 啓一（株式会社レスキューナウ危機管理研究所代表取締役）
朴 宇一（韓国ハンセン氏病患者支援団体「常緑会」代表）
Shant amrita chaitanya（僧）
池谷 啓（フリーライター）
梶原 景昭（国士舘大学21世紀アジア学部教授）
三浦 宏一（社団法人世界貿易センター（東京）理事長）
早坂 毅（NPOコンサルタント・税理士）
廣渡 謙二（株式会社シーディック代表取締役）
黒澤 司（元日本財団）

特定非営利活動法人国際ボランティア学生協会

2011年度年次報告書

IVUSA Annual Report 2011

2012年7月発行

編集・発行：特定非営利活動法人国際ボランティア学生協会広報部

TEL/FAX 03-6751-2683 E-mail ivusa-office@ivusa.com



IVUSA Annual Report 2011